欠　塚　古　墳

筑後市大字前津字塚山所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 8 集

1993

筑後市教育委員会

欠　塚　古　墳

筑後市大字前津字塚山所在遺跡の調査

1993

筑後市教育委員会

序

欠塚古墳の発掘調査は欠塚古墳の買収および保存整備に伴って、筑後市・筑後市教育委員会が欠塚古墳調査団に委託して平成元年度に実施したものです。

欠塚古墳は平成５年度から保存整備に着手する計画になっており、近い将来、古墳公園として一般に公開される予定です。同じ八女古墳群の石人山古墳や弘化谷古墳とあわせて歴史学習の場として活用が期待されるところです。

発掘調査では、欠塚古墳が前方後円墳であることや、九州では珍しく造り出しをもつことなどが確認され、蓋型の埴輪をはじめ様々な遺物の出土をみることができました。

この報告書はその発掘調査の記録であり、今後の文化財保護思想の普及の一助として、また学術研究の資料として、広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この報告書の刊行にあたり、発掘調査を快くお引受けいただいた欠塚古墳調査団代表の佐田茂先生をはじめ、いろいろと御指導・御協力いただいた関係各位と、猛暑期にもかかわらず発掘調査に参加された皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成５年５月

筑後市教育委員会
教育長　森田基之

例　　言

1．本報告書は、1989（平成元）年７月17日から８月12日まで欠塚古墳調査団が、９月１日から1990（平成２）年２月25日まで、筑後市教育委員会で行った欠塚古墳の発掘調査報告書である。

2．本古墳は福岡県筑後市大字前津字塚山に所在する前方後円墳である。

3．本古墳は当初、日本紙工株式会社の工場用地として破壊される運命にあったが、筑後市当局の努力によって、買上げ、保存することになった。しかし、用地取得の関係から、全面買上げにはいたらず、前方後円墳の前方部の一部は消滅してしまった。

4．本報告の執筆は、第１、２、４、６、７章を佐田茂が、第３章を佐田、江口寿高、第８章を江口が、第４章第３節の出土遺物は、佐田、平塚あけみが担当した。なお、第５章の欠塚古墳についての記録は、波多野皖三『筑紫史論』第３輯（1975年）から再録したものである。

5．出土遺物の整理、実測、製図は、平塚あけみによるものである。

6．発掘調査中の写真は、江口寿高、岩越幸義、永見秀徳が撮影したもので、遺物写真は、江口寿高が撮影した。

7．本書の編集は佐田茂が行ったが、平塚あけみの援助を受けた。

8．調査後、報告書作成までの間には、堤諭吉、古賀正美、永見秀徳、小林勇作、野間口靖子、江崎千鶴氏に色々な援助を受けた。謝意を表します。

本　文　目　次

第1章　位置と環境 …… 1
第2章　調査にいたる経過 …… 3
第3章　調査の経過 …… 5
第4章　調査の内容 …… 7
　1.　墳　　丘 …… 7
　2.　内部構造 …… 9
　3.　出土遺物 …… 11
　4.　小　　結 …… 28
第5章　欠塚古墳についての記録 …… 30
第6章　出土した円筒埴輪について …… 36
第7章　八女古墳群のなかでの位置づけ …… 41
第8章　欠塚古墳関係の聞き書 …… 48

挿　図　目　次

第1図　遺跡分布図（1/25,000）……（折込み）
第2図　欠塚古墳墳丘測量図 …… 8
第3図　欠塚古墳各トレンチ土層図（1/40）……（折込み）
第4図　欠塚古墳石室実測図（1/40）…… 10
第5図　須恵器実測図①（1/3）…… 12
第6図　須恵器実測図②（1/3）…… 13
第7図　須恵器実測図③（1/3）…… 14
第8図　手づくね土器・小札・ガラス玉・石器実測図（1/2）…… 15
第9図　その他の遺物実測図（1/3）…… 16
第10図　普通円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類」実測図（1/6）…… 19
第11図　普通円筒埴輪　口縁部「Ⅱ類」実測図（1/6）…… 20
第12図　円筒埴輪　底部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）…… 21
第13図　円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）…… 22
第14図　朝顔形円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）…… 23
第15図　朝顔形円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）…… 25
第16図　形象埴輪　蓋（きぬがさ）実測図（1/6）…… 26

第17図　その他の形象埴輪実測図（1/6）…… 27
第18図　鹿毛塚古墳見取図並出土遺物 …… 34
第19図　欠塚古墳石室南側壁推定復原図 …… 35
第20図　鹿毛塚古墳出土遺物 …… 35
第21図　復原円筒埴輪実測図①（1/6）…… 36
第22図　復原円筒埴輪実測図②（1/6）…… 37

図　版　目　次

PL. 1　(1)　欠塚古墳全景（空中写真）
　　(2)　同　前　方　部（南より）
PL. 2　(1)　造　出　し　部（北西より）
　　(2)　造　出　し　部（南西より）
PL. 3　(1)　石　　室（西より）
　　(2)　石　　室（東より）
PL. 4　(1)　後円部2Tr・6Tr付近（南西より）
　　(2)　周　濠　土　層（1Tr北面）
PL. 5　須　恵　器
PL. 6　(1)　須恵器　甕・器台細片（表）
　　(2)　同（裏）
PL. 7　(1)　須恵器　坏蓋（昭和28年 岡山村「影塚古墳」出土）
　　(2)　手づくね土器・小札・ガラス玉・石鏃
PL. 8　土錘・染付・蔵骨器
PL. 9　(1)　埴輪（蓋（きぬがさ）・朝顔形）
　　(2)　普通円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類」
PL. 10　普通同筒埴輪　口縁部「Ⅱ類」
PL. 11　円筒埴輪　底部「Ⅰ類・Ⅱ類」
PL. 12　(1)　円筒埴輪　胴部
　　(2)　朝顔形埴輪　口縁部
　　(3)　朝顔形埴輪　筒部
PL. 13　前方部周濠出土　蓋（きぬがさ）
PL. 14　(1)　その他の形象埴輪
　　(2)　刷毛目調整・ヘラ記号など

第1章　位置と環境

筑後市は穀倉地帯である筑後平野の一角にあり、北に三潴町、東に八女市、南に瀬高町、西に大木町という環境にある。標高５ｍから20ｍぐらいまでの間に市内はおさまり、低地に派生した10ｍ前後の低丘陵上の先端部近くに、多く集落は営まれていたようである。

石人山古墳、岩戸山古墳などを含む八女古墳群のある八女丘陵は、東西に10㎞程延びているが、西の方は広くなり、だらだらとした低丘陵がつづいている。欠塚古墳は、この丘陵の西端近くにあり、２㎞程西へ行くと、広い水田地帯を望むことができる。所在地は福岡県筑後市大字前津といい、国道209号線の赤坂交差点を東に折れ、１㎞程行き、五差路になった欠塚の信号を右（南）に折れ、200ｍ行った道路の右側にある。

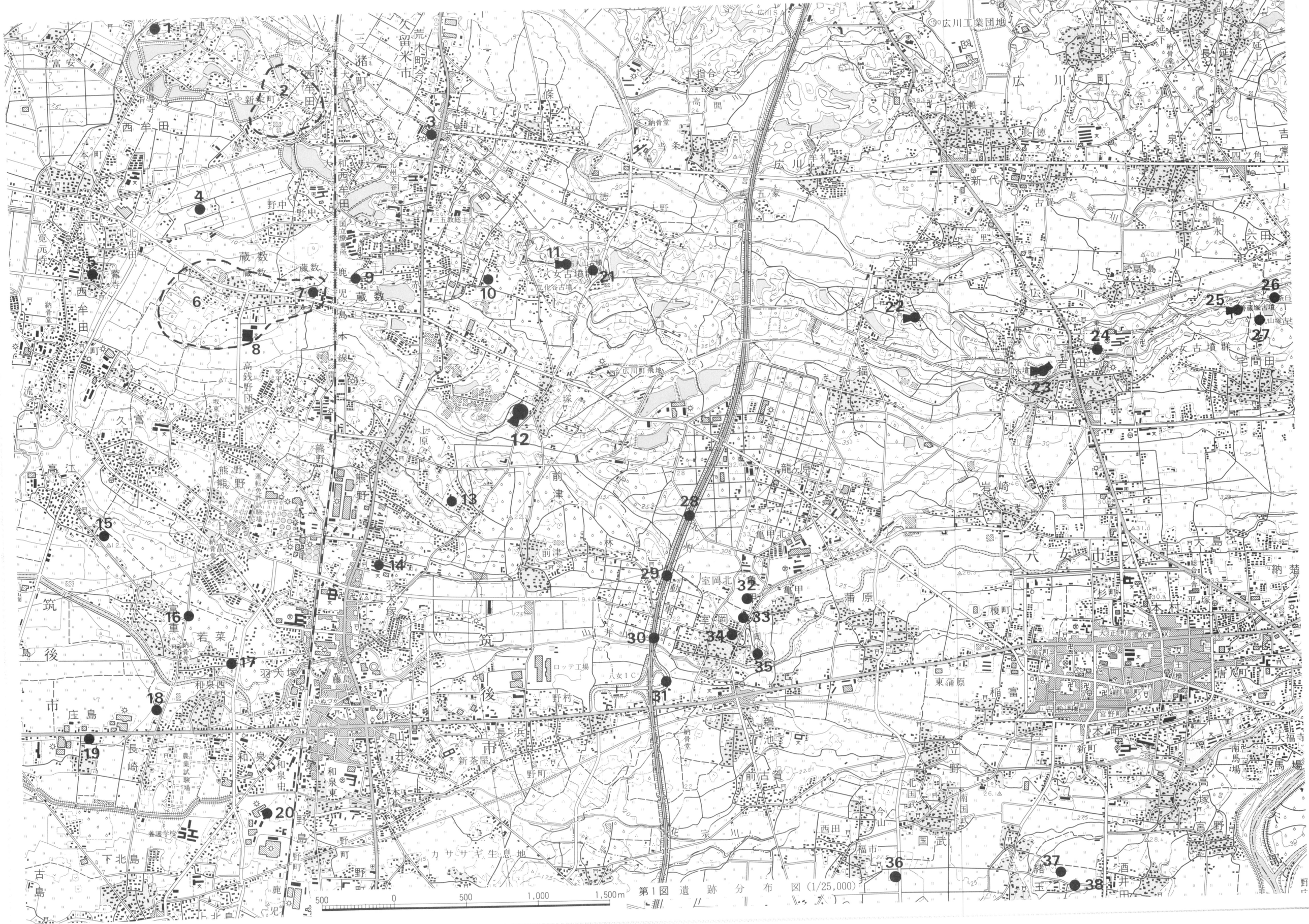
低丘陵の先端には小さな谷がいくつも入りこんでいる。欠塚古墳もそうした小さな谷に面したところにあり、標高30ｍ程のところである。北方１㎞ぐらいのところには、前方後円墳で、横穴式石室、横口式家形石棺、武装石人をもった石人山古墳。円墳で、石屋形をもつ横穴式石室を内部主体とし、円文、双脚輪状文、靫などの装飾をもつ弘化谷古墳がある。石人山古墳、弘化谷古墳の近くには、ほかにも古墳があったようだが、今ではほとんどなくなっており、実態はつかみにくい。

筑後市内では、ほかに一条一ト塚に千人塚古墳、西牟田に瑞王寺古墳がある。千人塚古墳は未調査で内容がわからないが、墳丘規模の相当大きい円墳の可能性がある。瑞王寺古墳は既にこわされて、今は見ることができない。堤諭吉氏を中心とする筑後考古学研究会の例会で、たまたま古墳の周辺を歩いている時に、こわされているのを目撃し、南筑後教育事務所の川述昭人氏に連絡、かろうじて発掘調査だけは行われた。すでに半壊していた古墳ではあったが、円墳で、きれいに葺石がめぐり、内部に竪穴系横口式石室をもち、副葬品に鏡、有孔円板、臼玉、鐙、轡、鉸具、留金具、刀子、鉄鏃、石突、鋤先、須恵器があり、欠塚古墳とも近い時期のものである。さらに、瑞王寺古墳の北北西１㎞程の、八女丘陵の最先端には十連寺古墳がある。瑞王寺古墳と石人山古墳の中間の位置にほとんど削平された径25ｍ程の円墳があり、６世紀末の須恵器が採集されている。『筑後将士軍談』に「石人ヨリ二丁余」とされる塚が、この古墳と考えられるものらしい。

欠塚古墳より西へ２㎞程のところに蔵数という集落がある。この地域は標高10ｍほどの低地に突き出した微高地で、東野屋敷遺跡では弥生時代中期の甕棺墓が調査されている。筑後北中学校用地の森ノ木遺跡では240軒以上の住居跡が調査されている。住居跡が複合した遺跡で、弥生時代中期から古墳時代後期にわたる集落で、二つの広場を中心として、集落群が構成され、変遷をたどることができる。また、この蔵数からは子持勾玉も発見されており、欠塚古墳の時代でも有力な集落であったことがうかがわれる。

分布地図遺跡名一覧

1．十連寺古墳
2．十八銭亀遺跡
3．瑞王寺古墳
4．田佛遺跡
5．鷲寺遺跡
6．蔵数遺跡群
7．蔵数東野屋敷遺跡
8．森ノ木遺跡
9．長原山遺跡
10．鯉の谷遺跡
11．石人山古墳
12．欠塚古墳
13．前津中ノ玉遺跡
14．羽犬塚遺跡
15．高江遺跡
16．辻遺跡
17．若菜経塚遺跡
18．坊田遺跡
19．石塚寺跡
20．井原口遺跡
21．弘化谷古墳
22．神南無田古墳
23．岩戸山古墳
24．乗場古墳
25．善蔵塚古墳
26．茶臼塚古墳
27．丸山塚古墳
28．西中ノ沢遺跡
29．坊野遺跡
30．野口遺跡
31．道添遺跡
32．室岡山ノ上遺跡
33．亀ノ甲遺跡
34．北小路遺跡
35．岡山山古墳
36．中里遺跡
37．深田遺跡
38．京田遺跡



第1図 遺跡分布図(1/25,000)

第2章　調査にいたる経過

現在、筑後市では、筑後市史の編さんが進行中であるが、編さん委員会のおりに、佐田は筑後市内には古墳が少なく、調査されたのは瑞王寺古墳だけで、内容的にとぼしいことを強調していた。そして、欠塚古墳は墳丘もすでになく、石室もほとんどこわれているので、費用も少なくて調査できるので、ぜひ確認調査をやらせてほしいという希望を出していた。それに対して、事務局は社会教育課をはじめとする役所内での担当部局と討議を行って、検討してみるということであった。

そうこうしているうちに、欠塚古墳を含む12,972㎡が、株式会社日本紙工に買収され、工場用地として利用されることになった。そこで、筑後市は貴重な古墳でもあり、ぜひとも保存したいという意向で、話し合いを進め、会社側と折衝の末、買上げ保存ということになり、喜ばしい成果があがった。しかし、従来、径30m程の円墳として知られていたために、買収地域の選定に際しても、その範囲の設定の仕方、会社側の土地利用の問題とのからみもあって、調査によって確定された前方後円墳の全域を保存することができなかったのは、残念なことであった。

調査に際しては、口火を切ったこともあり、佐田へ依頼があり、考慮の末、筑後考古学研究会の会員と一緒に発掘調査を行うことにした。ほとんど破壊されているとはいえ、保存されることになったので、周濠などの全面調査は差しひかえ、古墳の内容を把握できる範囲でとどめることにした。

調査団の構成

調査担当者	佐賀大学教授	佐田　茂
現地主任	筑後考古学研究会	江口寿高
調査参加者	（筑後考古学研究会）	
	堤　諭吉	松永辰男
	古賀正美	有田正吾
	山下　雄	藤吉正二
	岩越幸義	緒方恵美
	平塚あけみ	小沢太郎
		（奈良大学学生・現久留米市教育委員会）

筑後市教育委員会（発掘調査時）

教　育　長	森　田　基　之
社会教育課長	江里口　　充
係長	松　永　盛四郎
同和教育主査	後　藤　秀　夫
社会教育係	松　尾　恵美子
	高井良　宣偲衣
	光　延　久　幸（文化財担当）
	木　本　敏　昭
	永　見　秀　徳（文化財担当）
体育係長	山　口　逸　郎
体　育　係	江　口　昌　勝
	田　中　純　彦

発掘調査、報告書の作成については下記の方々に御協力をいただきました。記して謝意を申し上げます。

佐々木隆彦（南筑後教育事務所）、川述昭人（甘木歴史資料館）、赤崎敏男（八女市教育委員会）、松村一良、萩原裕房、富永直樹（久留米市教育委員会）、木本保男（筑後市史編さん委員会）、西健一郎（九州大学）、中村勝、武藤昭典、松永タミ子、田中　弘、坂田健一（筑後考古学研究会）

筑後市教育委員会（現職員）

教　育　長	森田　基之	社会教育係	永見　秀徳（文化財専門職）
部　　長	橋本　益夫	〃	小林　勇作（　〃　）
社会教育課長	下川　雅晴	体育係長	渡辺　幹雄
社会教育係長	松永盛四郎	体　育　係	江口　昌勝
社会教育係	安徳　房子	〃	津留　俊彦
〃	水田　　進		

第3章　調査の経過

当初の予定では、欠塚古墳と工場用地となる周辺とは、同じ時に発掘調査を行うことにしていたが、筑後市教育委員会社会教育課と佐田自身のスケジュールが合わず、結局、相前後して調査を行うことにした。

調査は1989年（平成元）７月17日に開始された。発掘現場の責任者には、筑後考古学研究会の江口寿高にたのみ、それを筑後考古学研究会の会員が応援する体制をととのえた。

南筑後教育事務所の佐々木隆彦氏の予備調査において、前方後円墳の可能性も予想されていたので、まず墳丘形態の確認に力を注ぐことにした。墳丘はすでになくなっていたが、径30ｍぐらいの円墳であるとの波多野晥三氏の報告と考え合せて、まず残存している石室を中心として、東西、南北方向に幅２ｍで十字のトレンチを入れた。その結果、墳丘端部と周濠が明確になったが、盛土は全く消滅していることが判明した。道路に近い南側部分は、現在の地表面が低くなっていることもあり、痕跡をつかむことができなかった。さらに１トレンチと２トレンチの間に１本と、前方後円墳だとすれば、くびれ部と考えられる部分に２個所トレンチを入れて、全体の確認を目ざした。

西側くびれ部と思われるところで、１トレンチのところまで、後円部の部分で７ｍ、110度ほど折れて６ｍ、さらに90度東南に折れて3.6ｍの石列を確認した。石列は常識的には葺石の基底部となる部分であるが、積み上げは残っておらず、基底の石としては、差し込みも弱く、葺石状に上まで積み上げるには弱いような気もする。90度に折れた部分が墳丘の端で、円墳に張り出し部分をもつ形態なのかとも考えたが、前端の3.6ｍのびる石列が終わり、すぐに地山になるところからすれば、造り出しの部分とも考えられたが、筑後市が買上げた部分がここまでであったために、前方部の調査は、教育委員会社会教育課にゆだねることにした。1989年（平成元年）９月からの調査で、前方部の確認が行われ、張り出している部分が造り出しであることが判明し、築造時の位置に残っている葺石はなかったが、前方部周濠内に葺石の残骸の塊石が多く残っていたことから、本来は葺石もあったことが明らかになった。

一方、東側のくびれ部と思しき部分は、わずかに段落ちらしき部分がみられるが、西側部分のトレンチで確認した墳丘端とは、状況がちがって、明確なものではなく、評価に悩むところであったが、調査終了後に図上復原してみると、くびれ部である可能性がきわめて強くなった。

内部構造については、既に波多野晥三氏の報告で、横穴式石室であることは判明していたが、報告の内容がわかりにくく、さらに、その時点より破壊は進んでおり、全体を知ることが困難であった。茶畑のなかで、ごみすて場のようになっていた石室の廃棄物を取りのぞくと、思ってい

たよりもはるかに悪い状態であった。残存していたのは、北壁で基底部の板石５枚だけで、３段に積み重ねているのが一番よく残っている程度であった。南壁は全く残っておらず、北側袖石も上半分はなくなっているが、かろうじて残っているのみである。南側袖石は抜き跡を確認しただけである。羨道部は全く痕跡を残しておらず、状況をつかむことはできない。

ほぼ完璧に破壊されていたにもかかわらず、周濠内から出土した円筒埴輪や須恵器によって時期をおさえることができるようになったし、前方後円墳であること、石室の構造ものちに述べるように、波多野氏報告と合せて、ほぼつかめるようになったことは成果としてあげられよう。

第4章　調査の内容

1．墳　　丘

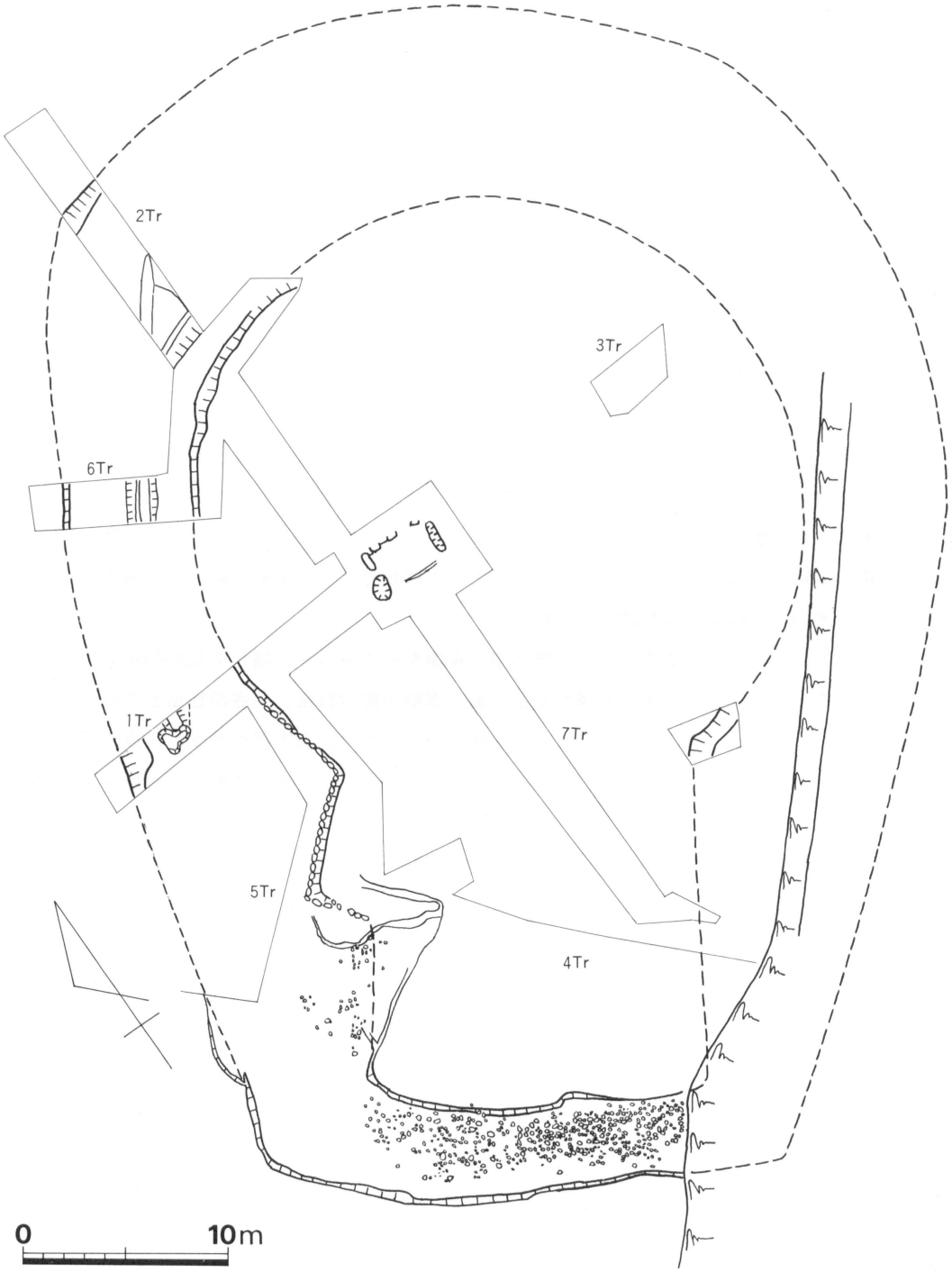
盛土は完全になくなっており、発掘調査の時点には平坦になっていた。買上げ保存地域を調査対象にしていたので、全面発掘はやめ、トレンチによる調査を中心に行った。保存部分は円墳であることを前提とし、前方後円墳であることを加味しながら設定したが、業者側も道路に面したところをあまり広くとられると、用地として用をなさないのでこまるということで、妥協の産物として、もし前方部が含まれなくてもやむなしということになり、前方部の前半分は筑後市教育委員会社会教育課によって全面発掘がなされた。

その結果、前方部の比較的短い前方後円墳であることが判明したが、後円部後側は、個人の宅地になっており、調査ができなくて、古墳の東側は下が道路になり、のり面があり、現況ではのり面の方にすこし傾斜しているために、墳丘端部を明確にとらえることができなかった。想定される周濠も道路の部分になってしまい、のり面での土層観察でも、築造当時の地表面より下であるせいか、地山の土壌をみるだけであった。

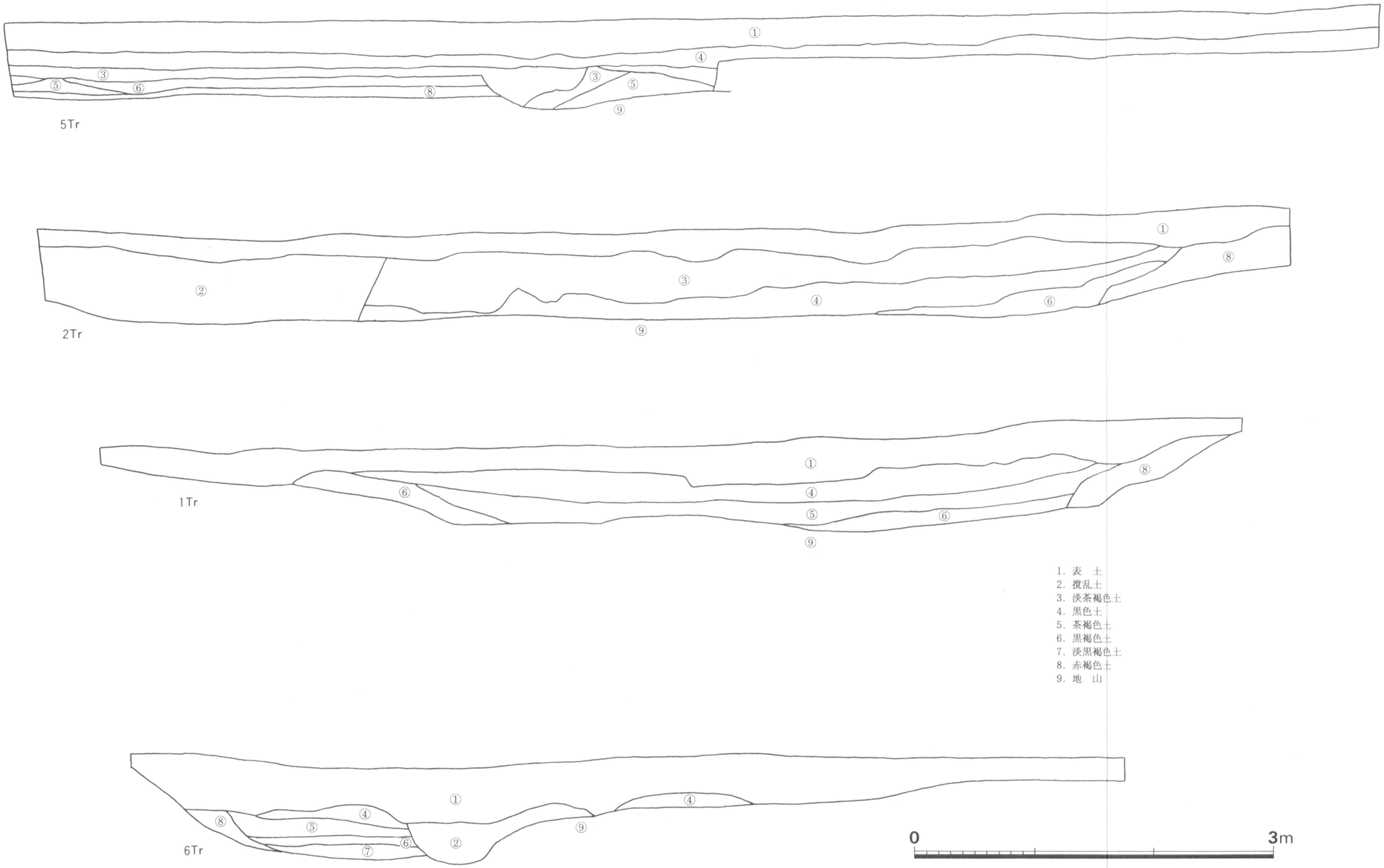
そうした不確かな部分もあるが、前方後円墳の規模をみてみると、墳丘全長が45m、周濠を含めた全長が推定58mとなる。後円部径が30m、前方部幅が推定17m、長さが15mとなる。周濠の幅は前方部で4～5m、後円部西側で6m、北側で9mとなり、前方部がせまく、後円部がすこし広くなるという形態をとっている。周濠はくびれ部分で狭くならず、変形した盾形を呈すると考えられる。

墳丘右側（西側）には2辺が3.3m×6mの直角三角形の造り出しを付設している。左側（東側）部分では確認することができなかったので、あったのか、なかったのかはわからない。基底部に10～20cmぐらいの河原石を並べているが、造り出し部分だけでなく、一部後円部墳丘端部にも延びている。墳丘端部の石列は地山の上にのっているが、造り出し部は黒色火山灰土の上にのっている。後円部の墳丘端の削り落しは造り出し部分の内側2m程のところまで入っており、墳丘築造に際してのプランの段階では、通常の造り出しを持たない前方後円形をつくり、その後、改めて造り出し部分を付設したものと考えることができよう。ただし、どの段階で造り出し部分が付設されたのかを考える材料はない。

前方部前面の周濠のなかには河原石が多く落ち込んでおり、葺石に利用されていたものと考えることができる。造り出し部分、後円部の墳丘端の一部にも根石が残っていることからもそれはうかがわれる。



第2図　欠塚古墳墳丘測量図



第３図　欠塚古墳各トレンチ土層図（1/40）

2．内　部　構　造

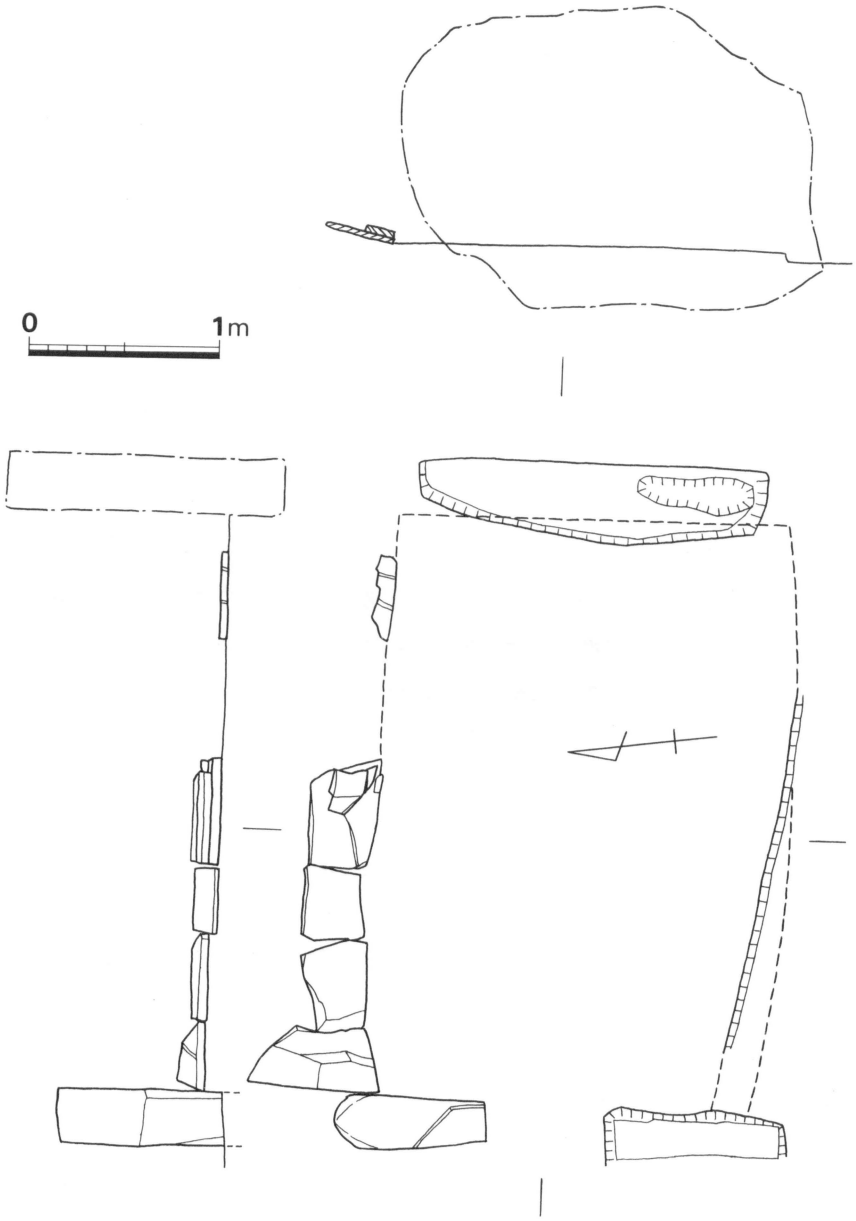
石室はほとんどがこわされており、無残な姿で残っていた。玄室の北壁が横に５石と、北袖石の一部が残っているのみであった。削平がひどく掘り方も完全になくなっており、奥壁の石の抜き跡と、南袖石の抜き跡を検出したのみである。

側壁を構築する際には、石を置く部分をすこし掘りくぼめ、そこに黒っぽい粘土質の土を置き、側石を固定したらしく、北壁では側壁の石の下に認められる。南壁は石が残っておらず、黒っぽい粘土質の土がすこし残っているだけで、それによって南側壁の位置を想定することができる。

このように、残存状態の悪いなかで、石室の姿をみると、玄室の内法で、長さ3.1m、幅が奥で2.05m、中央で2.1m、袖で1.75mの大きさであると考えることができる。玄門の幅は0.65mぐらいと考えられ、羨道に関しては痕跡を全く残していないので不明である。この数値は今回の調査から想定したものであるが、波多野氏報告では、石室長3.78m、幅は奥で2.1m、高さ1.6mとなっており、石室長の数値がすこし異なっているが、袖石の幅を加えると、3.3m程となり、以前は羨道もすこし残っていたのかも知れない。

波多野氏の調査と今回の調査から石室の構造を考えてみよう。まだ残存状態のよかった前回の報告が大きな手縣りとなるが、玄室は奥壁の腰石には、床面から0.8mの高さの大きな石を使用し、その上に５段程板石を積み上げ、さらにその上に比較的大きめの石を２段内側にせり出させて積み上げていることが想定される。側壁は両壁とも基底部分から0.4～0.8mの長さの板石を小口積みにしている。前回の報告でみる限りでは、下のほうが若干石が大きく、上の方がすこし小さくなっている傾向をみることができる。袖の部分は両方に床面から高さ1.35mの袖石を立て、その上に比較的大きな石を２段に内側にせり出させている。その上に天井石をのせているが、天井石は２枚である。（第19図）

側壁の持送りの具合いはわからないが、縦断面でみると、床面から1.3m前後の高さまではまっすぐで、その上の２段が両方とも内側にせり出し、その上に天井がのるという構造をみることができる。この構造は八女市の真浄寺２号墳、立山山古墳群にみられる竪穴系横口式石室と呼ばれるものと同様である。総合すれば、玄室の内法は長さ3.1m、幅が1.75～2.1m、高さ1.6m、玄門の幅0.65mの大きさということができよう。羨道については全く知る材料がない。



第４図　欠塚古墳石室実測図（1/40）

3．出　土　遺　物

須　恵　器　①（第５図、PL．５，６）

有蓋高坏（１・２）　ともに青灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。１は脚部を欠損している。坏底部は上位まで回転ヘラ削りを施す。受け部は水平に整えられ、立ち上がりは直立気味で先端は平らである。復原口径10.0cm、受け部径12.2cmを測る。

２は脚部に三角形の透かしを４個有し、裾部の肩には一条の沈線がめぐる。受け部は水平で、立ち上がりは直立気味である。坏底部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデ調整を施す。復原受け部径12.3cm、底径8.9cmを測る。石室周辺の表土から出土したものである。

蓋（３）　細片で、天井部は回転ヘラ削り、その他はヨコナデ調整である。シャープな稜を有し焼成はやや軟質である。

瑞（４・５）　ともに細片の資料である。４は肩部に明確な稜があり、一条の沈線をめぐらせその直下に櫛目刺突文を施す。焼成は良好で緑褐色の自然釉がかかる。復原球状部径は10.6cmである。

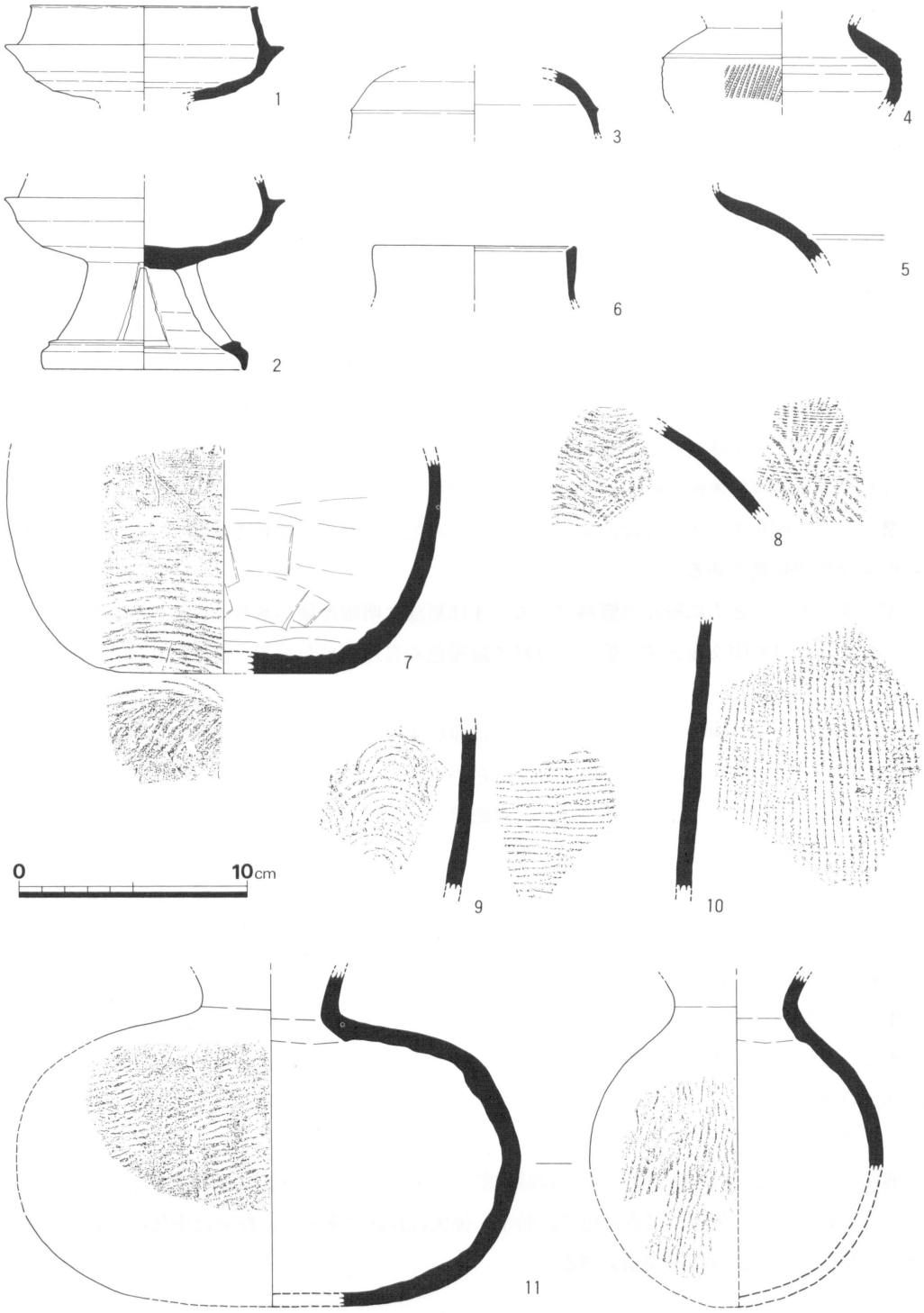
５の球状部は20cm前後と思われる。肩部には浅い沈線が一条めぐり、その直下に波状文か。器面は腐食が著しいが、暗緑褐色の自然釉がみられる。

壺（６・７）　６は口縁の細片で、口唇は肥厚しナデによる沈線が入る。胎土・焼成とも良好。復原口径は９cmを測る。

７の外面は底部まで平行叩き文を施している。上部は叩き文をナデにて磨り消し。内面は底部を強い指ナデ、体部はヘラ状工具にてナデている。青灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。復原底径9.6cmを測る。

甕（８～10）　すべて細片で、胎土・焼成とも良好。外面は平行叩き文、内面は同心円叩き文である。８は平行叩き文のち粗くカキ目調整。淡青灰色を呈す。９は外面に自然釉が薄くかかり暗緑灰色を呈している。10はかなり大型と思われる。暗青灰色を呈し、内面は叩き文をヨコナデにて磨り消している。

横瓶（11）　体部は米俵形を呈し、口縁端部を欠損している。外面は平行叩き文のちナデにて部分的に磨り消す。色調は暗青灰色で、胎土・焼成は良好であるが、作りは全体的に雑である。体部は長径22.0cm、短径13.0cmを測る。



第5図　須恵器実測図 ①（1/3）

須　恵　器　②（第６図、PL. ６）

器台（12～17）　すべて細片で、施されている波状文はそれぞれ異なる。12はやや厚手で三角形の透かしを有する。焼成は良好で、外面に黒緑色の自然釉が薄くかかる。

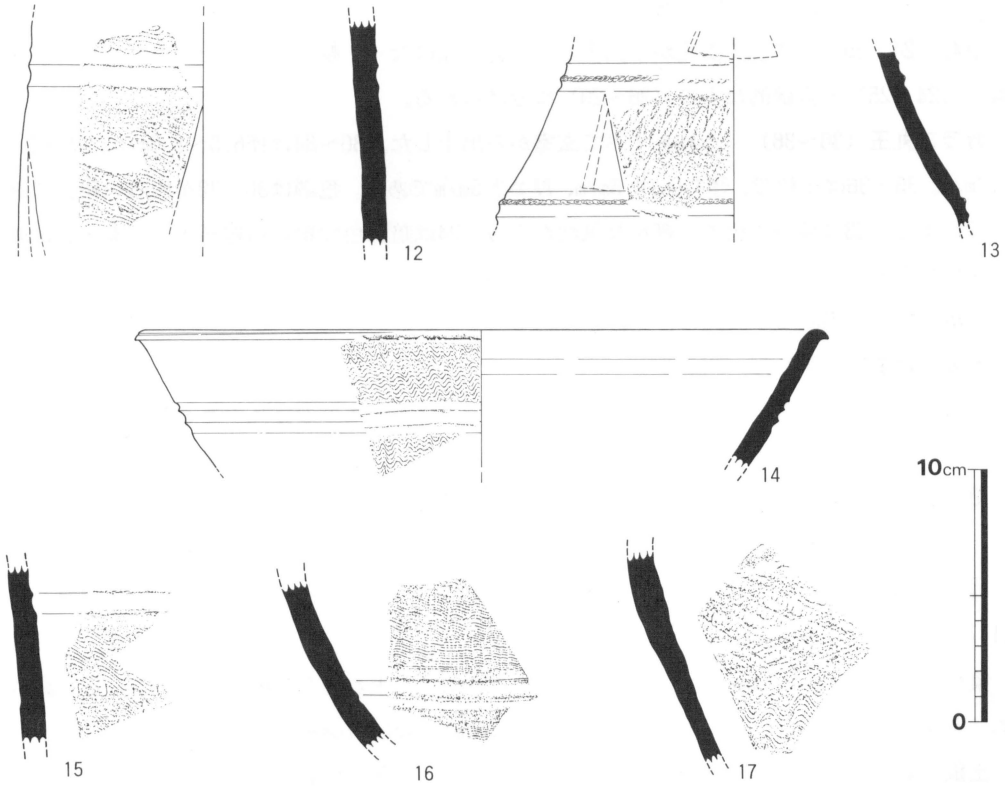
13は器面の腐食が著しい。突帯には櫛目刺突文がみられ、三角形の透かしを有す。淡青灰色で焼成は良。

14は口縁部の資料で、端部がシャープに反転し一条の沈線がめぐる。灰茶褐色を呈し胎土・焼成とも良好である。復原口径27.5cmを測る。

15はやや厚手で、三角形の透かしを有する。

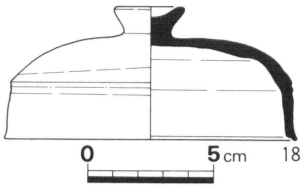
16は外面が黒灰色を呈す。

17は横方向のカキ目ののち、櫛目刺突文と波状文を施し、三角形の透かしを有する。



第６図　須恵器実測図 ②（1/3）

須　恵　器　③（第７図、PL. ７）



第７図　須恵器実測図 ③（1/3）

蓋（18）　今回の発掘調査の出土品ではないが、昭和28年３月13日、岡山村「影塚」古墳出土とされている資料である。天井部は回転ヘラ削りで、他はヨコナデ調整を施す。口縁端部はやや外反し、口縁内傾の段はシャープである。外面は風化が著しい。口径11.6cm、器高5.4cmを測る。

手づくね土器・小札・ガラス丸玉・石器（第８図、PL. ７）

手づくねミニチュア土器（19～23）　19～22は高坏である。19はほぼ完形で、淡茶褐色を呈し、細砂粒を多く含む。焼成はやや甘い。20・21は茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良。22も茶褐色を呈し胎土は精選されているが、焼成はやや甘い。23は椀で、灰茶褐色を呈し胎土・焼成ともに良い。20は6Tr、他は2Tr周濠から出土したものである。

小札（24～29）　すべて玄室から出土した。完形品はなく、幅は2.0～2.3cmで、やや湾曲するもの（24・25）と直線的なもの（26～29）に分けられる。

ガラス丸玉（30～36）　これもすべて玄室から出土した。30～34は径6.0～8.0m/m、厚さ4.5～7.0m/m。35・36は小粒で、径4.0～4.5m/m、厚さ2.5m/mである。色調は30～32が明るい紺色に細い白線が走る。33は淡い水色で、細かな気泡が入る。34は暗緑色で細い白線が入る。35・36は明るい紺色である。

石器（37）　黒曜石の石鏃で、完形品である。

その他の遺物（第９図、PL. ８）

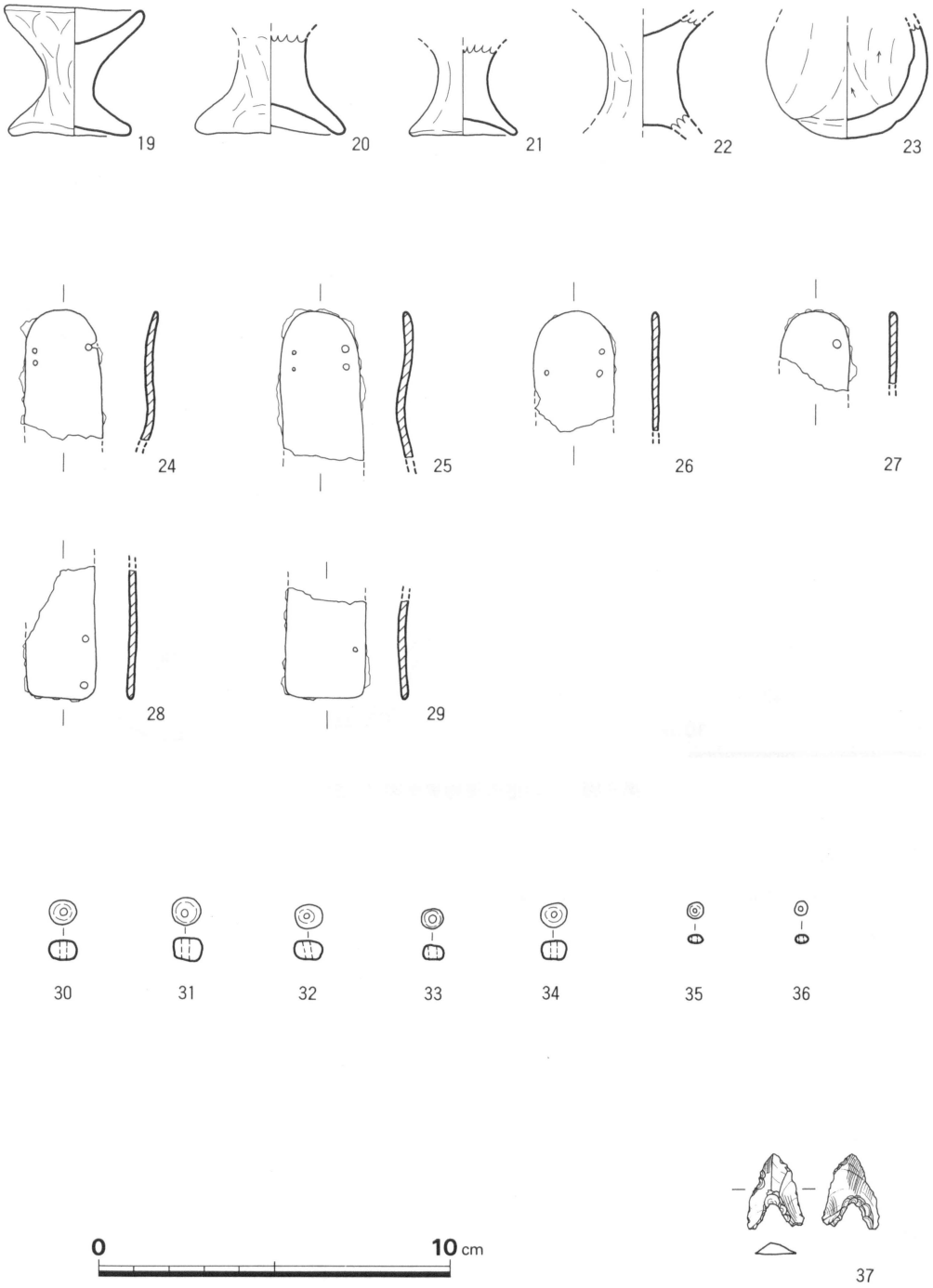
土錘（38）　土師質の土錘でほぼ完形である。一方に途中までの穿孔のあとがみられる。色調は茶褐色で砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。全長7.5cm、最大径3.2cm、重さ70ｇである。

蔵骨器（39・40）　土師質の素焼き土器（蒲池焼？）で、セットで出土した。淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。39は鈕のない蓋で、天井径13.2cm、口径14.3cm、器高2.3cmを測る。40の口縁端部は平坦面をなす。また、体部外面に墨書がみられる。口径は12.0cm、底径11.3cm、器高11.7cmを測る。３トレンチで出土。

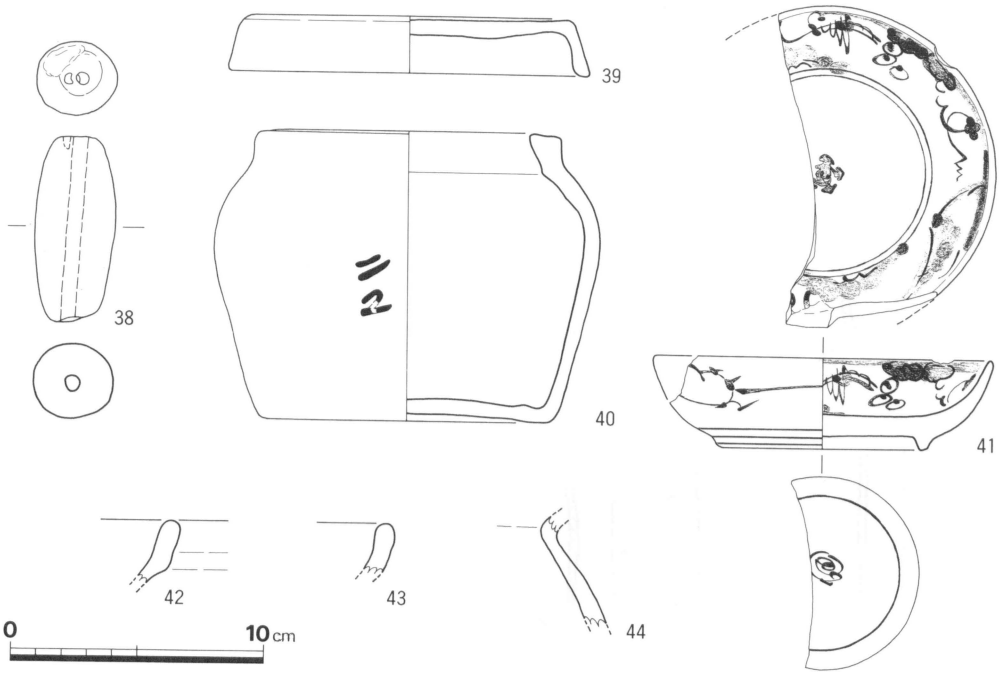
染付皿（41）　胎土は乳白色、畳付の部分のみ露胎で、重ね焼きの砂が付着している。高台裏に「うず福」の銘あり。復原口径13.5cm、底径7.8cm、器高3.7cmを測る。

土鍋（42・43）　ともに口縁部の細片で、外面にススが薄く付着している。

壺（44）　細片で、表面に丹塗りのあとがみえる。



第８図　手づくね土器・小札・ガラス玉・石器実測図（1/2）



第９図　その他の遺物実測図（1/3）

埴　　輪

普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・形象埴輪が出土した。

円筒埴輪（朝顔形を含む）

口縁部が大きく外反するものと、外反度は小さく直立気味のものがみられる。口縁端部は、平坦なものと上面をわずかに凹ませるものがある。突帯は刷毛目調整後に貼り付けてあり、全体的に小さく突出度もあまり高くなく、また形状も一定ではない。全形に復原できるものがなかったので、全長・突帯の数については不明であるが、朝顔形については一点のみ、筒部で４条の突帯が確認できた。調整方法は、大半は刷毛目調整であるが、ナデ調整のものが数点あった。

今回出土した円筒埴輪は、年代的にかなりの幅がみられる。最下段突帯がヨコナデ整形のものと、指押さえのみのものが混在しているのである。口縁部から底部までを接合出来たものは一個体もなかったので一抹の不安はあるが、この分類にさらに各資料の刷毛目調整の方向・胎土・焼成等の観察結果を加味して、「Ⅰ類」と「Ⅱ類」に大別した。年代的には「Ⅰ類」の方が古い。出土量はパンコンテナー11箱分であるが、４：６で「Ⅱ類」の方がやや多い。

形　象　埴　輪

資料が少ないので確定はできないが胎土・焼成等から「Ⅰ類」に近いと思われる。ただし、円筒埴輪より若干細やかな胎土のものもある。出土量はパンコンテナー2箱弱であるが、大半は蓋（きぬがさ）一個体に復原されたので他の形象埴輪は十数点の破片資料しかない。

以下に、Ⅰ類とⅡ類の相違点・共通点を述べる。

ⓐ　最下段突帯の整形

Ⅰ類――・ヨコナデ整形

Ⅱ類――・指押さえのみ

ⓑ　その他の突帯の形状

Ⅰ類――・低い台形、または上面が凹んだ台形。

・突出した、ややシャープな台形。

・上向きの三角形。

Ⅱ類――・崩れた台形。

・いびつな浅いM字形。

ⓒ　刷毛目調整（刷毛目でなく、ナデ調整を施したものも「Ⅰ類」とした）

Ⅰ類（上半部の資料）

・すべて縦方向。

・口縁部を縦で、それ以下は横方向。

・朝顔形の場合、肩部はナデ調整でそれ以下を横方向の刷毛目。

（下半部の資料）

・横方向で、基底部のみ横・縦の組み合わせ。

Ⅱ類――・すべて斜め方向（口縁内面も）であるが、朝顔形については、肩部を斜め方向に施し、その下の段は突帯付近を横で、真ん中を斜め方向としている。

ⓓ　胎　　土

Ⅰ類――・砂粒を多く含むが、ナデ調整のもののなかに精選されたものがみられる。

Ⅱ類――・砂粒は少なく良好なものが多い。

ⓔ　焼成（Ⅰ・Ⅱ類とも黒斑は認められない）

Ⅰ類――・土師質を呈し、ほぼ良から非常に良好なものがみられる。

• 少数ながら、ナデ調整のものに焼成が非常に甘いものがみられる。

Ⅱ類――• 非常に甘いものと、須恵質を呈するものとに二分化する。ただ、須恵質といっても須恵器のような堅緻な焼成のものはごくわずかであり、大半は須恵質様と称した方が妥当かと思われる。

ⓕ 透孔――• すべて円形で、各段に2個ずつほぼ直交する形で穿つ。

• ほとんどの資料は二段目より穿孔しているが、朝顔形の資料（第15図89）のみ三段目から穿孔している。

ⓖ そ の 他

Ⅰ類――• 体部に「×」印のヘラ記号があるが、すべて横刷毛目のものである。

• 縦刷毛目と、ナデ調整のものに丹塗りがみられる。

Ⅱ類――• 斜め刷毛目で口縁が直行気味のものに、釣り針状のヘラ記号あり。

• 顔料はみられない。

普通円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類」（第10図、PL. 9）

Ⅰ類は更に調整方法の違いにより刷毛目調整をⅠａ類、ナデ調整をⅠｂ類とした。

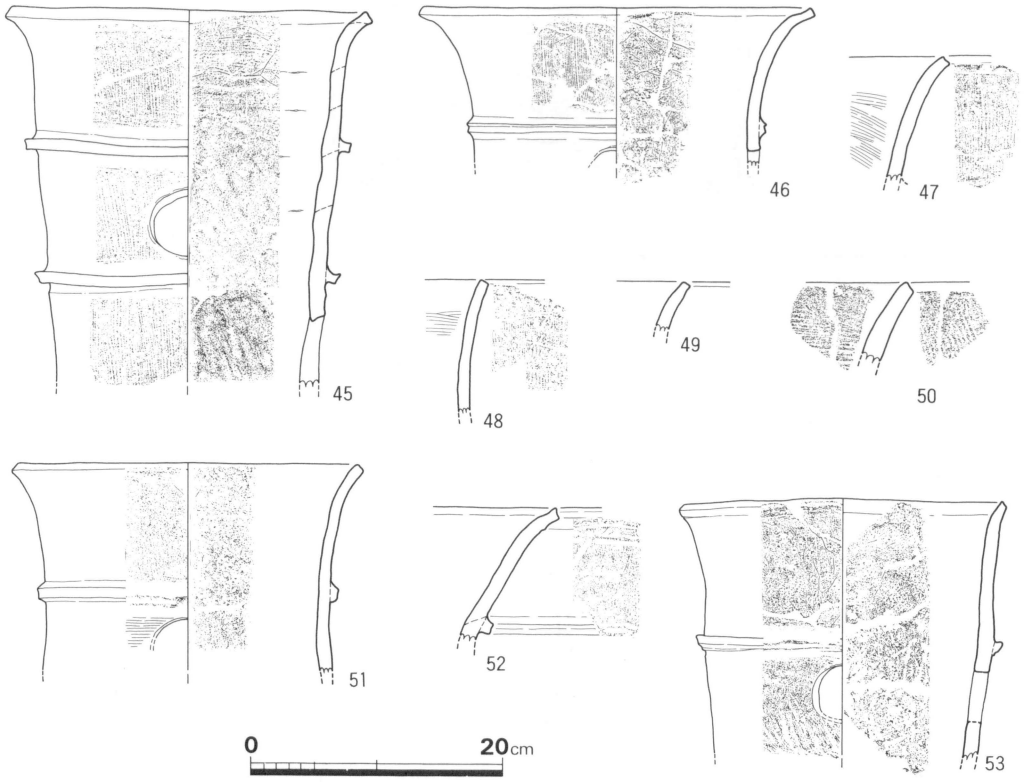
Ⅰａ類（45～51）　45は口縁端部が大きく外反する。突帯はシャープな台形状で、高さ1cmと突出度は出土品中一番高い。外面は縦方向の刷毛目、内面は口縁端部が横方向の刷毛目調整でその下はナデ調整であるが、粘土紐巻上げの跡がみられる。色調は赤色顔料のため鮮やかな赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。このタイプの出土は、この一個体のみである。復原口径29.0cmを測る。

46・47は、色調・胎土・焼成・刷毛目調整が共通である。ともに暗茶褐色を呈し、胎土・焼成も良好で、外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整である。46は口縁部が大きく外反し、端部は内湾気味である。突帯は浅いM字形。47はやや厚手である。

48・49も色調は茶褐色で、胎土・焼成・刷毛目調整は46・47とおなじである。

50は厚手で、太い刷毛目を外面は縦に近い斜め方向、内面は横方向に施す。暗茶褐色を呈し、胎土はやや粗いが焼成は良。

51の口縁部は緩やかに外反し、突帯は台形状をなす。焼成不良のため器面は腐食しているが、口縁部は縦方向、その下の段は横方向の刷毛目調整。色調は淡赤褐色を呈し、復原口径28.4cmを測る。



第10図　普通円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類」実測図（1/6）

Ⅰb類（52・53）　52は口縁部が大きく開き、外面は縦方向のナデで調整され、口縁直下に低い稜線がみられる。明赤褐色で焼成はやや甘い。

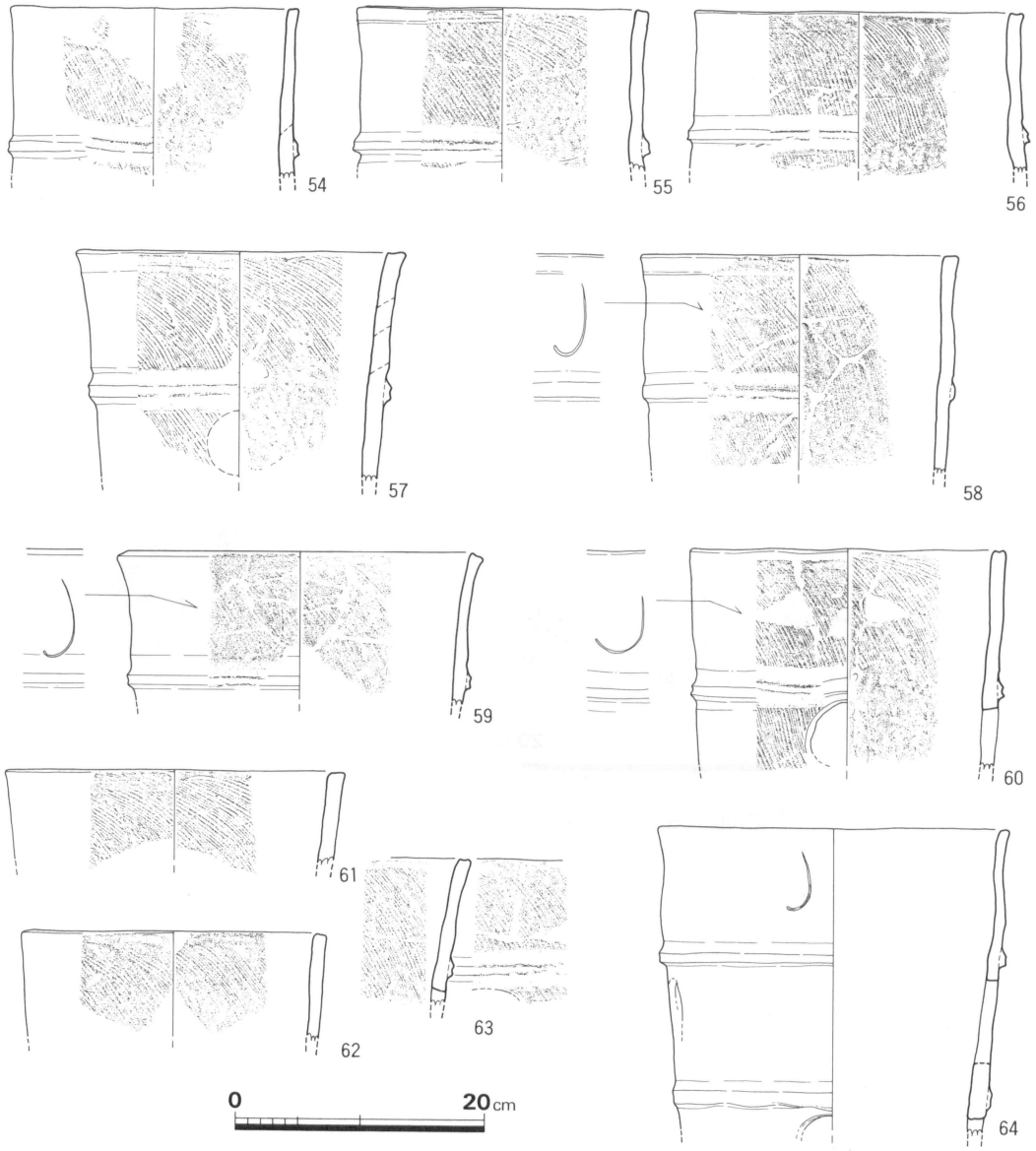
53は内外面ともナデ調整で、上向きの三角突帯を貼り付け、やや小さい透かし孔を有する。黄褐色を呈し、胎土は良好であるが焼成は非常に軟質。復原口径は26.0cmを測る。

普通円筒埴輪　口縁部「Ⅱ類」（第11図、PL.10）

ここに挙げるものは、器壁の色が灰色系を呈する堅緻なものから黄色系を呈する軟質なものまであるが、すべて刷毛目は内外面とも斜め方向で、口縁部の形態が直行気味のものである。また、釣り針状のヘラ記号がみられる（58・59・60・64）のもこのタイプに限られる。法量では口径が24cm以下の小形のもの（54・55）と、25～30cmのもの（56～64）がみられる。

54は須恵質に近く堅緻で、胎土もほぼ良好である。突帯はいびつな台形状を呈す。復原口径23.6cmを測る。

55は口縁直下に沈線が一条めぐる。黄茶褐色を呈し、焼成はやや甘い。復原口径24.0cmを測る。

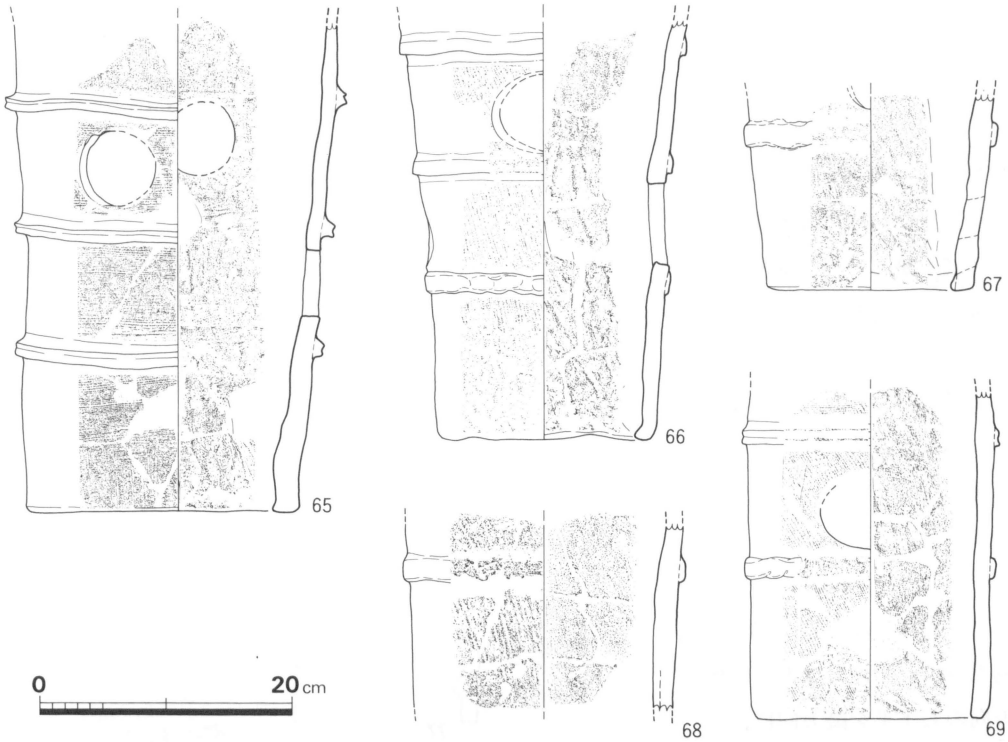


第11図　普通円筒埴輪　口縁部「Ⅱ類」実測図（1/6）

56は須恵質に近く、突帯は浅いM字形である。灰褐色～赤褐色を呈し、胎土は精選されている。復原口径27.0cmを測る。

57も須恵質に近く、やや厚手である。刷毛目は内外面とも鮮明で、外面には板小口にたまった粘土が器面についた「粘土だまり」がみられる。淡赤褐色を呈し、復原口径27.0cmを測る。

58の突帯は低い台形状を呈す。口縁直下には一条の沈線がめぐり、色調は橙褐色で焼成は普



第12図　円筒埴輪　底部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）

通。復原口径26.0cmを測る。

59の突帯は浅いM字形を呈す。黄茶褐色を呈し、砂粒多く焼成は軟質である。復原口径30.0cmを測る。

60は須恵質に近く、浅いM字形の突帯を有し、口縁は直行している。胎土は精選され色調は赤褐色～灰褐色である。やや楕円形を呈し、長径26cm×短径24cmを測る。

61・62はともに焼成がやや軟質である。61は黄茶褐色を呈し、復原口径は28.0cmとなる。62は赤茶褐色を呈し、復原口径25.0cmを測る。

63は須恵質に近く、突帯は浅いM字形である。色調は灰赤褐色を呈す。

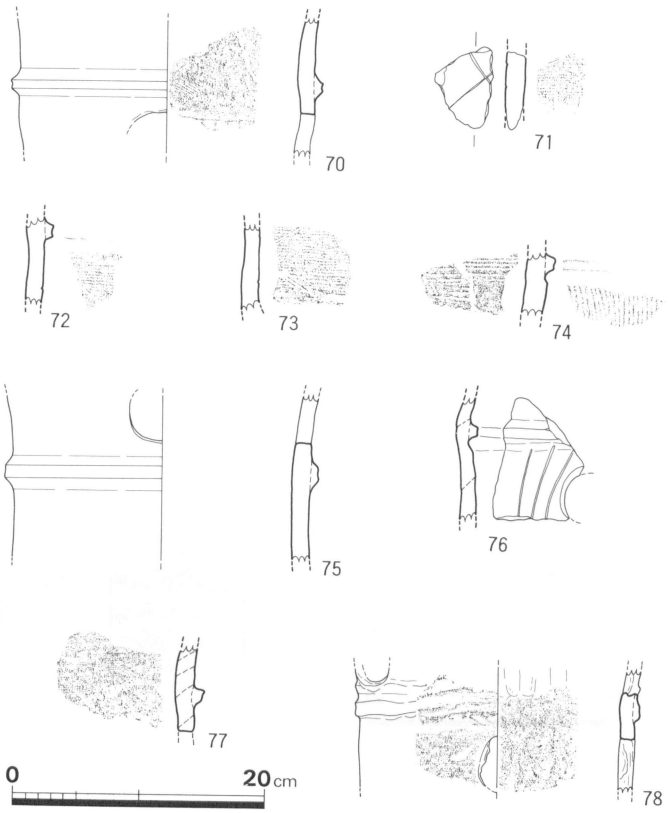
64は器面摩耗のため刷毛目調整は不明瞭である。突帯は低い台形状。色調は明赤褐色で、胎土に3～5m/mの砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。復原口径28.4cmを測る。

円筒埴輪　底部「Ⅰ類・Ⅱ類」（第12図、PL.11）

円筒埴輪には、最下段突帯の調整がヨコナデ整形されたものと、指押さえのみのものと両方のタイプが確認され夫々を「Ⅰ類」、「Ⅱ類」と分類したことはすでに述べた。出土量の割合は底部のみについていえばⅡ類が大半を占め、最下段突帯がヨコナデであると確認し、復原し得たのは

朝顔形を含めて２点だった。また、底部のみでは朝顔形との区別が難しいが、朝顔形の頸部と接合可能と思われるものもある。

Ⅰ類（65）全体的にややいびつで上半部は楕円形を呈すと思われる。突帯は浅いM字形で、突出度は１cm弱であるが出土品の中では高い方である。透孔は二段目より穿つ。刷毛目は、一段目は上半を横方向のち下半を縦方向に、二段目と三段目は横方向に、四段目は残存部は少ないが縦方向の刷毛目調整がみられる。暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。復原底径22.0cmを測る。



第13図　円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）

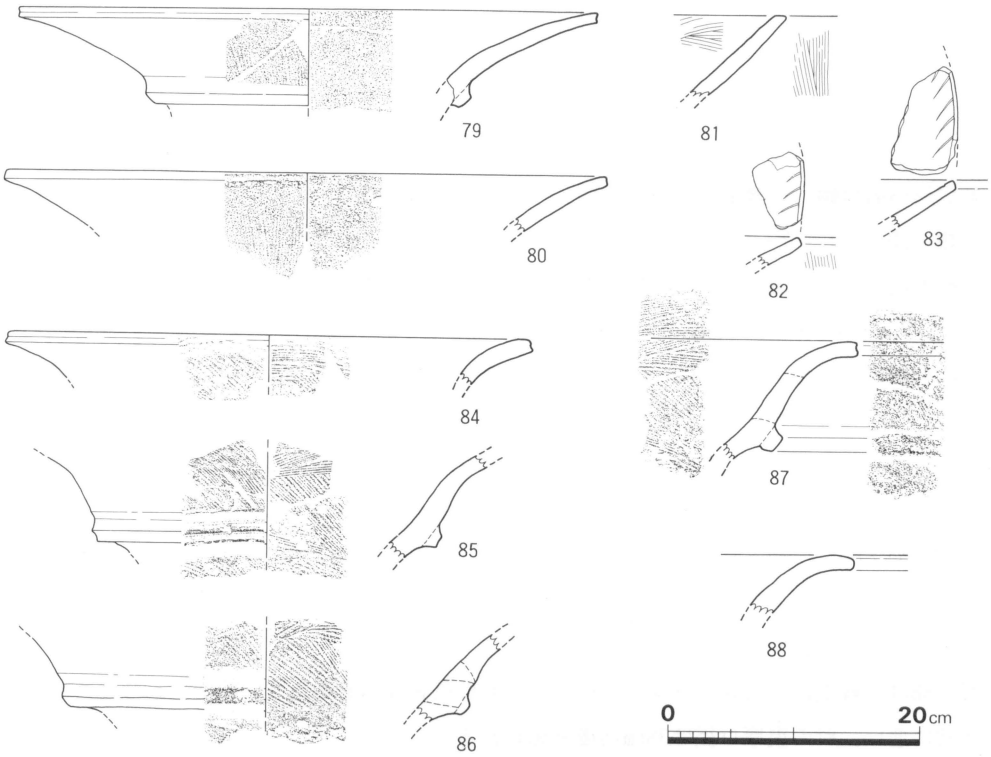
Ⅱ類（66～69）　66・67は口縁部に向かって大きく開き、68・69は直行すると思われる。

66は最下段以外の突帯はヨコナデにて整形され、いびつな台形状で突出度は低い。刷毛目は、一段目から三段目は右下から左上への斜め方向に施しているが、四段目は突帯直上のため横方向と思われる。内部は強い指ナデにて仕上げ、透孔を二段目より穿つ。淡茶褐色を呈し、砂粒はやや少なく焼成は軟質である。復原底径は17.5cmを測る。

67は一段目より緩やかに開くタイプである。斜めの刷毛目は細かく、内部は下から上方向に強い指ナデ。突帯は指押さえのち上面を軽くナデて平坦にしている。黄茶褐色を呈し、砂粒少なく焼成もほぼ良好。復原底径17.0cmである。

68は淡茶褐色で砂粒多く、焼成も不良。

69は後述の朝顔形埴輪（第15図、91）と接合可能と思われる。刷毛目は斜めで、三段目は横方向である。橙褐色を呈し、砂粒は少ないが、焼成はやや甘い。復原底径19.0cmを測る。



第14図　朝顔形円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）

円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」（第13図、PL. 12）

Ⅰａ類（70～74）　70は細片で、上面がやや凹んだ台形状の突帯をもち、刷毛目は突帯の下は横方向、上は縦方向である。茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

71～73は３点とも外面に「×」のヘラ記号がみられる。刷毛目はすべて横方向で、色調・胎土・焼成も同じであり、タイプとしては第12図の65とおなじである。

74は太い刷毛目が鮮明で、外面に縦方向、内面には横方向に施す。やや厚手で暗茶褐色を呈し、外面には赤色の化粧土を施している。第10図の50と同一個体と思われる。

Ⅰｂ類（75～77）　75・76は、内・外面ともナデ調整で一部丹塗りあり。胎土・焼成も良好である。75の突帯は上面がやや凹んだ台形状で、76にはヘラによる線刻模様が施されている。

77は円形の透かしを持ち、内面は横方向の刷毛目、外面はナデ調整である。黄褐色を呈し、焼成はやや軟質。

Ⅱ類（78）　須恵質に近く、突帯の貼り付け、透孔の作りともに雑である。外面はヨコナデ、内面はナデ調整で、茶褐色～灰褐色を呈す。

朝顔形円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類・Ⅱ類」（第14図、PL. 12）

Ⅰ類（79～83）　79・80は後述のもの（第15図、89）と接合可能と思われる。内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目調整で、色調は暗茶褐色を呈し、砂粒は多いが焼成はほぼ良好である。復原口径は、79が46.2cm、80が48.0cmを測る。

81は口縁端部がやや内湾気味に開き、上面は水平に整えられている。赤褐色を呈し焼成はやや甘い。

82・83は極細片のため朝顔形に断定すべきかどうか。外面は縦方向の刷毛目で、内面はナデのちヘラ描き模様を施す。暗茶褐色を呈し、焼成はやや不良。

Ⅱ類（84～88）　刷毛目はすべて外面が斜め方向、内面は横方向と一様である。84・85は須恵質を呈し、色調は赤褐色で同一個体ともみえる。84の復原口径は42.0cmを測る。

86は焼成が悪く、明橙褐色である。

87・88は口縁端部が大きく外反している。ともに色調は明赤褐色で、胎土は良好であるが焼成は非常に悪い。87の復原口径は38cm前後と思われる。

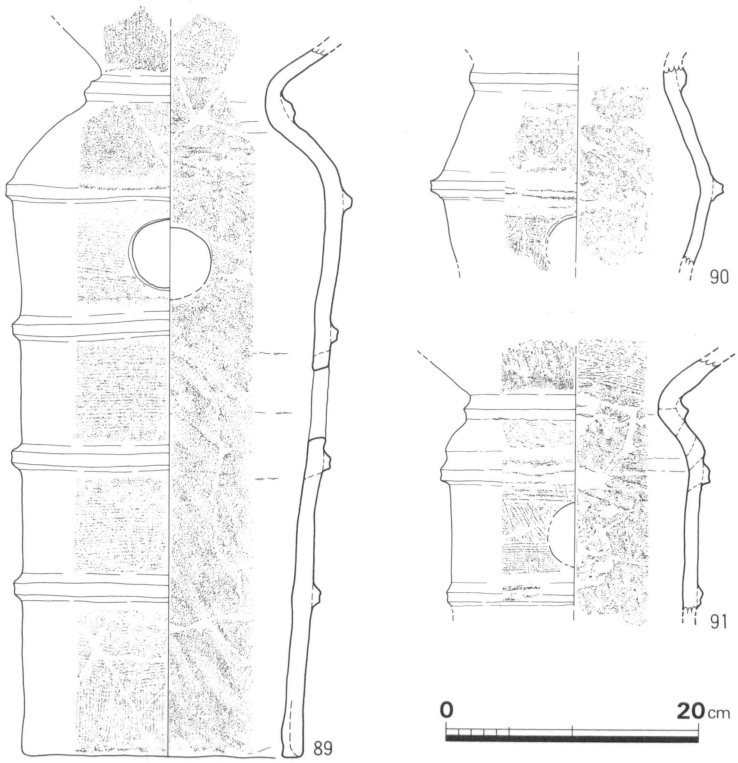
朝顔形円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」（第15図、PL. 12）

筒部のみの資料では朝顔形と確定できるものは少ないが、実数はまだ多いかと思われる。その少ない中にも三つのタイプがみられ、各１点を図示し得た。

Ⅰ類（89・90）　89の破片の大部分は、墳丘造り出し部より横倒し状態で一括出土したものであり、頸部から底部までを接合出来た唯一の資料である。口縁部は、第14図の79か80が同一個体と思われる。内面はナデ、外面は横方向の刷毛目調整であるが、一段目の下半部の刷毛目は縦方向である。突帯は、突出度はそれほど高くないが整った台形状を呈し、最下段までヨコナデにて整えられている。透孔は三段目と四段目に穿つ。色調は暗茶褐色で、砂粒はやや多いが焼成は良好である。底径22.3cmで、現存高57.7cmを測る。

90は肩部が直線的でやや長く、刷毛目をヨコナデにて磨り消しているが、その下の段の刷毛目は縦方向である。突帯は上面が凹んだ台形状で、突出度は高い方である。明赤褐色を呈し、胎土・焼成はほぼ良。第14図の81と同じタイプである。

Ⅱ類（91）　筒部が直行している。粗い刷毛目を肩部は斜めに、その下の段は斜め方向のちに突帯近くを横方向に施している。頸部の突帯は三角形を呈し、筒部の突帯はいびつな台形状である。色調は橙褐色で焼成はやや甘い。これと同じタイプは、径の若干異なるものが２、３片出土している。



第15図　朝顔形円筒埴輪　筒部「Ⅰ類・Ⅱ類」実測図（1/6）

形象埴輪　蓋（第16図、PL. 13）

92　前方部周濠出土品で、四翼が別作りタイプのものである。頸部に貼付け突帯がめぐるが、剝離している。また円筒状の基底部には、やや小さい円形の透孔を2個穿つ。すべてナデ調整で、基底部は板状工具でケズリに近いナデを施し、内面や笠部の裏側のナデは強く、指頭圧痕が鮮明である。笠部の表面は特に丁寧に仕上げ、沈線にて放射状の文様を施す。内面には粘土紐巻上げの痕跡が鮮明に残る。色調は淡茶褐色で砂粒多く、焼成は普通である。底径16.0cm、器高37.1cm、復原笠部径46.0cmを測る。

その他の形象埴輪（第17図、PL. 14）

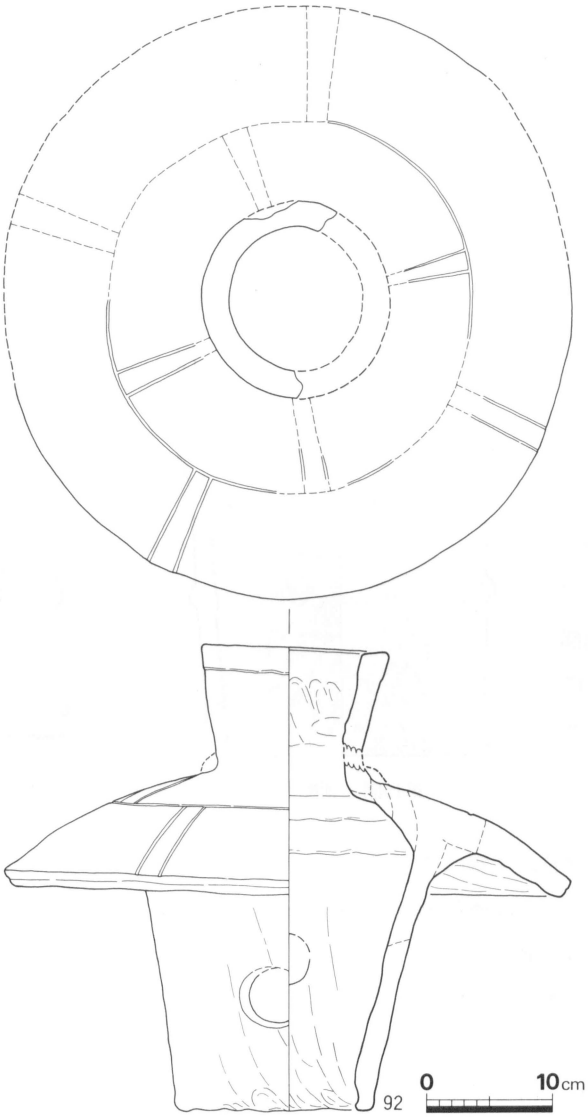
93・94は蓋の受け部と笠部の細片であるが、胎土・焼成等前述の資料とおなじである。

95は家形埴輪である。両端は面取りされているが、窓と出入り口を現すものであろう。外面は細かい刷毛目、内面は強い指ナデ調整を施す。砂粒は少ないが焼成はやや甘い。

96～98は不明品。97・98は、粗い斜め方向の刷毛目のちに低い突帯を貼り付けている。淡茶褐色を呈し、砂粒多く焼成も良くない。98の復原口径は32.0cmを測る。

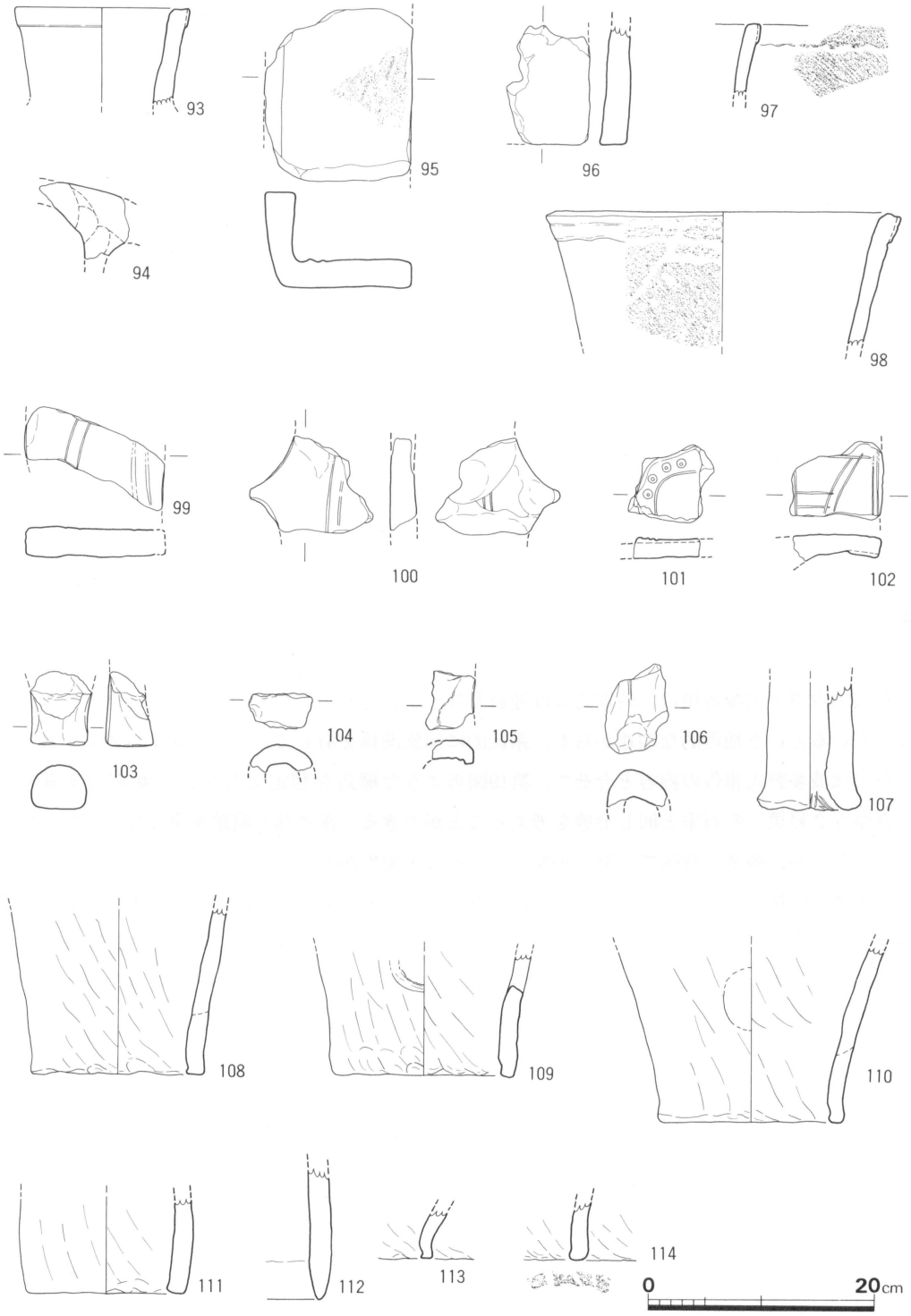
99～102は片面あるいは両面に線刻文様がみられる。すべて淡茶褐色を呈し、砂粒は少なく、焼成はやや軟質である。100は両面に線刻文様があり、蓋の四翼ではないかと思われる。101は竹管押圧とヘラ描きの組み合わせになっている。

103～107は不明なものもあるが、動物その他の脚部として挙げている。



第16図　形象埴輪　蓋（きぬがさ）実測図（1/6）

108～114は底部の資料で、すべてナデ調整である。胎土も良好で、焼成は112がやや軟質、113が須恵質を呈する他は、ほぼ良好である。



第17図　その他の形象埴輪実測図（1/6）

4．小　　結

残存状態の悪い古墳ではあったが、八女古墳群のなかに、もうひとつ前方後円墳を加えることになったのは大きな成果といえる。

墳丘のみの全長45m、周濠を含めた全長58m、後円部径30m、前方部幅17m、前方部長15mの前方後円墳である。西側くびれ部には２辺が3.3m、６mの直角三角形の造り出しをもっている。

古墳の東半分では、判断できる痕跡をとどめておらず、全貌をつかむことはできないが、小規模ながら造り出しをもつ前方後円墳であることが明らかになった。八女古墳群で造り出しをもつのは、すぐ近くにある石人山古墳である。石人山古墳では北側の造り出しは現在でもはっきりとみることができるが、南側の造り出しは流れてしまったのか、わずかに盛り上がっているようにも見えるが、現況では何もいえないような感じである。ただ、墳丘上での須恵器の採集は、この南側造り出しと想定される部分に集中しているところから、本来造り出しがあった可能性は高い。

石人山古墳と欠塚古墳は、時期的には連続しないが、造り出しをもつという共通性をもち、近接しているという地理的な関連からも、系統的に同族関係を有していたことが十分考えられる。

石室は波多野氏報告の内容と合せて、第19図のような構造を想定したが、八女市の本６号墳（真浄寺２号墳）の石室と同じ形態を考えることができる。羨道部の痕跡が全くないので、何ともいえないが、厳密な意味で、竪穴系横口式石室の可能性が強い。

出土遺物は報告にあるように、波多野氏調査の分を含めても、非常にとぼしいものである。時期を決めるものには、須恵器と埴輪があるが、須恵器は田辺昭三編年で、ＭＴ23と類似しており、５世紀後半から末頃を考えることができよう。円筒埴輪には２種があり、従来の編年では、明確に時期差を示している。本６号墳（真浄寺２号墳）に類似する突帯をもつものと、くずれた形の突帯をもつものである。５世紀代の埴輪と６世紀代の埴輪は簡単に見分けのつくもので、分離することは可能であるが、同時に出土しており、出土状況からは区別できない。あきらかに新旧を有する円筒埴輪の出土例は、久留米市善導寺の木塚古墳にもみられる。残存ながら、この古墳も墳丘をうしなっており、埴輪の位置などについては知ることができない。内部構造が横穴式石室であることから、追葬は容易に考えられるが、その時のものなのかも分からないし、何ともいえないが、時間的な幅をもって、この古墳が利用されていた可能性もないとはいえない。古い方の円筒埴輪は須恵器と同じ時期にすることができるが、新しい方の埴輪は、６世紀中葉以降に近い頃の形態を示している。

類似した古墳に甘木市の小田茶臼塚古墳がある。前方部が比較的短く、前方部の幅と後円部の径の比率が0.625となり、欠塚古墳の0.6に近い。内部構造の横穴式石室は割石小口積みで、構造的にも欠塚古墳とはすこし違っているようだが、近い時期を考えることができる。

八女丘陵上の前方後円墳で、石人山古墳と岩戸山古墳の間は空白になっているが、その間をこの欠塚古墳が埋めることになった。墳丘も石人山古墳では、後円部のみに周濠、周堤がめぐり、造り出しをもち、欠塚古墳では、全体に周濠がめぐり、造り出しをもち、岩戸山古墳で全体に周濠、周堤がめぐり、別区をもつというように、順次変化している様をみることができる。その性格については、後章でのべるが、非常に重要な位置を占めるものであることはまちがいない。

筑後市は地形的に、低地を中心としており、集落の調査は多いが、古墳の数は少ない。そうしたなかで、既知の古墳とはいえ、この欠塚古墳が保存されることになったのは喜ばしいことである。大部分が破壊されてしまっており、形状をもとに戻すことも非常にむずかしいが、筑後市当局において、整備計画が進行中であり、将来、文化財としての活用をめざしている。

第５章　欠塚古墳についての記録

欠塚古墳の発掘調査は今回がはじめてではなく、1950年代に福岡学芸大学（現福岡教育大学）の波多野晥三氏によって発掘調査が行われ、「鹿毛塚古墳」（『筑紫史論』第３輯1975年）として報告されている。もとより、今とは発掘技術も異なり、内容を理解できないところもあるが、今ほどには壊されていなくて、或る程度の内容を知ることができるので、以下に報告の内容を掲載しておこう。

鹿毛塚古墳

(1)　所在地と発見の動機

該古墳の所在地は八女郡岡山村西原部落の南端で、部落はずれの同部落より羽犬塚及び岡山村室岡にいたる二村道の分岐点の西側に在り、径約25m高さ約６ｍの円丘で、里人の話では、もとの頂点は東寄りで、西寄りはやや平坦をなし、宛も前方後円状の高低をなしていたと。５月上旬より西原～室岡間の村道改修工事のため、此の古墳の封土を切崩し作業中、中央から西寄りの地点に石室を発見され、偶々羽犬塚町居住の郷土史家池田氏の知る所となり、直ちに県当局に連絡し工事の中止、古墳の原形保存に尽力される所があったが、既に後述の如く一部は破壊されたあとで、又好奇心より可成りの撹乱もみうけられ、猶その一部は危く破壊をまぬがれ得ているので、その限りの状況を調査した。

(2)　外形及び封土の現状

前記工事のため封土の三分の二は切り取られたため外形は知ることが出来ないが、周囲を取巻く里道とそれに沿う数本の桜木によって、切り取られた部分の大方の想像が可能で、道と封土残部の間に掘られた溝があるが、周溝かどうか明らかでない。此の状況で復元すれば東西33m、南北29mのやや楕円形の外観を呈したと考えられる。

池田氏は側面図で前方後円墳を描かれた参考図を示されたが、今残された封土の現状からは、にわかに之が前方部と断定出来ないようである。此の部分は竹その他の雑木に覆われ、最高部は2.5mあってもとは小祠がまつってあった位置であり、その直下に石室がある。

此の石室の北側では殆ど羨道北壁に沿うて（石壁は露呈しない）切取りが進められているが、南側では石壁中央より羨道寄りの部分はなお封土につつまれていて、後記するように此の古墳の封土構築に貴重な資料を呈示している。

(3) 石室の構造

第18図に示す様に、側壁は粘板岩の最長80cmのものから40～50cmのものを石室の長さに横積みに積み上げ、羨門、天井、奥壁は粘板岩及び安山岩の１枚（天井は４枚）石を使用している。詳細は明らかでないが、以前に此の石室のことは知られていなかったようで、今度の工事で始めてその存在が明らかになった。従って最近この石室に入ることなどはなかった訳だが、石室発見の時既に北壁の一部は崩れ穴があいていたと云う。前部とも後部とも言いその位置は不明である。天井石の前方から２枚が崩れ込んでいるのとは、関係がない。副葬品が後述する様に僅少であることからすれば、相当以前に盗掘の厄にあったものと考えられる。

今度の工事で北壁面は石室中央より前部は下から５段位を残し、後半は全部を取壊されてしまっている。奥壁は原位置で押倒されているし、天井石の１枚ははぎとられて５m位移動され、然も二つに割られている。残された南壁は殆ど原型を保つごとく又他の天井石は崩壊を防ぐために松の木で支柱が立てられている。

石室の平面は奥壁の移動で完全を期し難いが3.78mの奥行で幅は２m内外、高さ1.6mである。割合に小形の石室であるが、石室の後半部は可成り破壊されていたらしく、南壁面を図示した様に後半が傾斜を示していて、この傾斜なりに取除かれた天井石はおかれていたと工事関係者も言っている。この様に奥壁に近くなるほど天井の低下する古墳例はきかない。仮に此の壁面は崩壊したのであって在来の石室と同形であったとみると、実測図の様に奥壁が幅2.1m高さ0.8mであるため石室の高さ1.6mなるためには今１枚の同形の石を必要とするが該当する石はない。此の南壁面の傾斜した部分の長さ2.3mとして、取除かれた天井石の1.6m奥壁0.8mは別の石の必要を考えさせない。ただこの際残された天井石と奥壁と取除かれた石がどのような関係にあったか構造上の復原が出来ないのが遺憾である。が、とにかく里人の言うように、このままを原形とすれば特例とも云うべき特異な構造をもっていると言うことになる。

天井前部は幅0.4m位の石２枚を斜に組んで更にその上に1.65mの石をのせている。前二者は南壁よりずり落ちて石室内に崩入った封土で支えられている。恐らく古くから此の様な状態になっていたので最近の工事には関係あるまい。北側羨門石は幅0.8m高さ1.35mの粘板岩で南側羨門石も之と同形のものだが土に埋れている。羨門も赤土に埋り羨道内の事情は明らかでない。

中央の天井石は安山岩で他は総て粘板岩を用い、壁面は朱で彩色されている。床面も朱で彩られるほか特別な様式はない。

(4) 遺　　物

石室発見と共に内部を好奇心から掻乱されていたため、調査にあたっても中央部より奥は床面の発見も困難であった。併し床面より0.5m位掻乱されたままになお土が取残されていたので包含遺物を発見するため注意した結果丸玉1個と鉄片9個を発見した。前半部よりは大体床面に近い高さから鉄片、玉類及び土器片数点を発見した。図中崩土をなお残すが之を取除けば、天井石を陥落するため止むなく中止した。此の部分には尚遺物を発見出来ると思うので他日を期し度い。

(イ) 玉　　類

滑石製の管玉2個とガラス製の小玉（又は棗玉）12個を蒐集する。管玉の1個は石室のほぼ中央部で鉄片、小玉1と共に出土し、他の1個は出土の位置不明、小玉12個中のうち7個は石室内より、残1個と他に4個（山口氏採集）の5個は出土位置不明である。12個中6個は径6㎜を越え、他の6個は3～5㎜のもの。色は浅青1個他は瑠璃色である。

(ロ) 金　属　片

桂甲と思われる20個の鉄片、8個の鏃柄（鏃）鉄鏃5、鉄環の破片と思われるもの4、その他異形の鉄片6、その一々は第18図に実物大のものを示した。桂甲と思われるもの20個のうち5は、その縁片に1乃至2の小穴をもつ、厚さ0.2㎝～0.4㎝、鏃柄（鏃）のうち2本は木質が附着している。鉄鏃5のうち3もまた矢軸の木質が附着している。鏃先は図示するように小形のものは菱形で、大形のものは三角形である。

図7の10は刀子に異物が附着せるものかと思われるが不明同図右側の10図は鏃柄に鉄錆が盛り上がっているものか、先端が球状に作られていることは他の鉄片と異なっている。13は図示せる如く内部が空洞をなしている。19は側面図に明らかなごとく留め金と思うが25は不明、4、8、31は夫々扁平な紐状を呈し、31は環状に図示したが必ずしも同一物の2片とは思えない。8図に注記したように僅かに金箔の残っていることからすれば、此等のものは総て渡金されていたもののように思われる。（注・この部分は図面が不正確なために番号は対応しない。）

(ハ) 土　　器

石室内より埴輪片2個と土師器片3個が出土した。此？の小片は図表5に示す床面に近く発見されたので、此の石室に副葬されたものかと思われるが、余りにも小片であるため断定的には言えない。尚埴輪は封土切取作業中に出土したようであるが完形品はなく、大部分は村道構築に運び去られ、数片が岡山校に保管されていると云う。また完形土器（不明）1個は水田村研究会員が保管していると云う。

(5) 封　　土

第18図に示した様に封土が切り取られ、石室の両面に断面が残されたことは、此の古墳の封土構造を考える上に好資料を提供した。同図中㋺㋩線はこの断面の一部を示すが、此の部分を第8図に詳記した。図中㋺～㋭線は水平線で之にほぼ垂直に㋑及㋩を求めた。此？諸点を含むⒶ面は石室の南壁の外側の面Ⓑと14(5)0度のひらきをなしている。

図示したのは石室の端から4mばかりであるが㋺のあたりから先は弯曲している。封土の上部は厚い赤土層で、その下に真黒い腐蝕土層がほぼ水平にあり、石室に近づくにつれ上端が階段状に上向し、㋺点に1、3つに別れ、その間に層土及赤土を挾んで石室に達している。此の3つに別れた黒い層の上辺は何れも階段状を呈している。層土とは赤土と黒土が交互に層状にあらわれた部分を意味し、点々で示した部分は暗灰色の土を、また下部の斜線は切取り工事で掻乱された土壌を示す。

図に表われた様に此の封土の断面は石室の周辺4mばかりは封土が水平層で構成されていない。尤も北壁側では既に封土が除去されているので此の面だけで即断することは如何かと思うが少なくとも南壁側断面ではこのことが云える。これは石室の構築にあたって全体的に封土を積み上げて行く代わりに、必要な部分にのみ封土を積んで行うと云う手法が取られた事を表していると云えよう。黒土層の上面が何故階段状をなしているかは不明である。

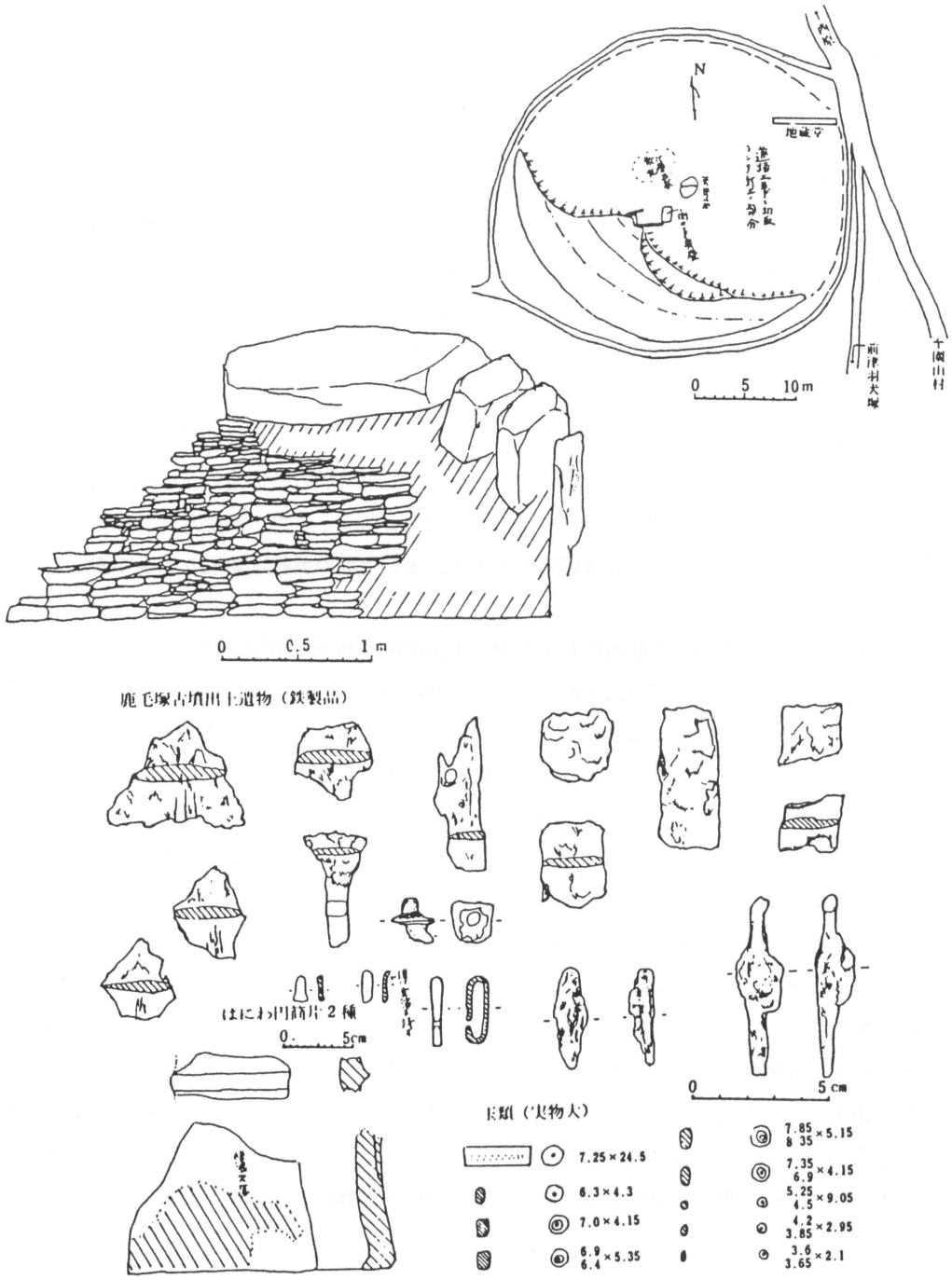
(6) 結　　語

この報告を終わるにあたって問題をまとめると次の2点になる。

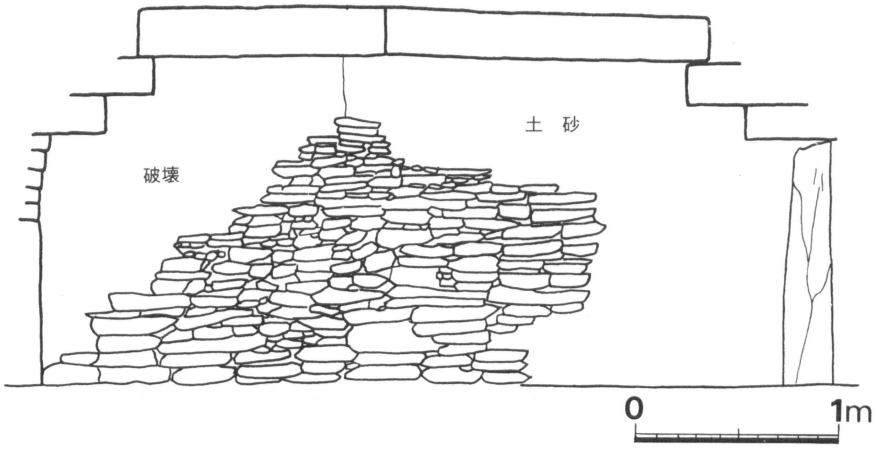
Ⓐ　石室の後部で天井が急角度で低下しているのは何故か。

Ⓑ　封土の水平層でなく石室周辺で必要に応じた部分積を行っていること。その技法及意味、時期の問題。

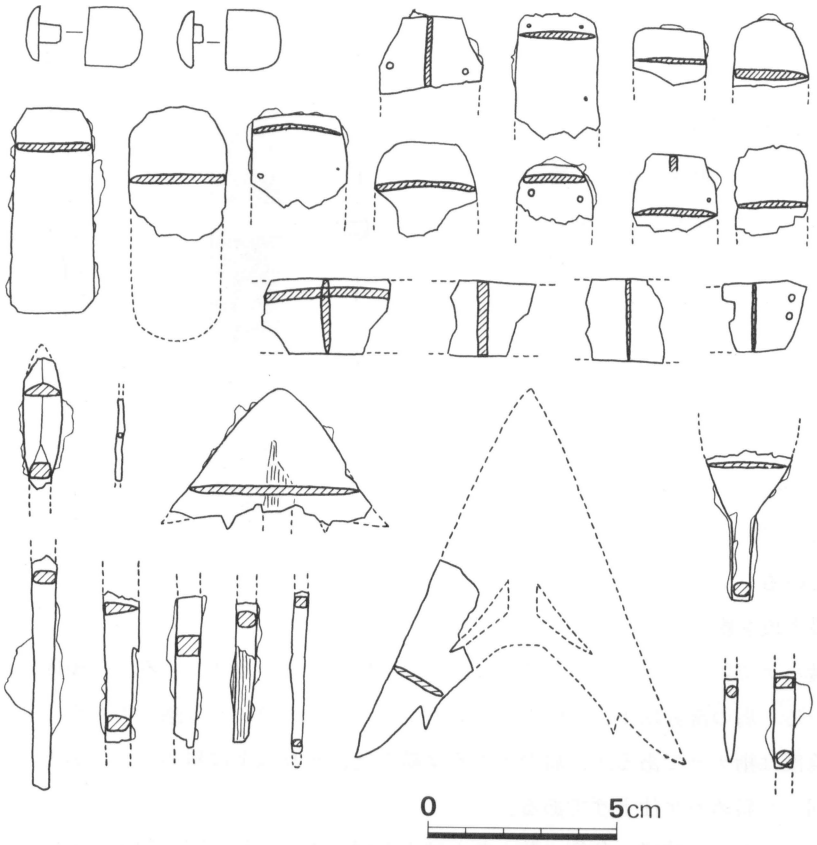
ⒶⒷ共に余り先例をきかない。殊にⒷについては封土の断面が見られる機会が余りないためにその例はあるにしても記録されることがすくないと考えられ、今度の様な偶然の機会を摑む以外に容易にその例を求めることは困難であると言わねばならない。従って此処で直ちに此の問題を速断することは避け、斯る事例のあることを示し、各位の御教示を俟つことにする。



第18図　鹿毛塚古墳見取図並出土遺物



第19図　欠塚古墳石室南側壁推定復原図



第20図　鹿毛塚古墳出土遺物（波多野氏調査分 1/2）

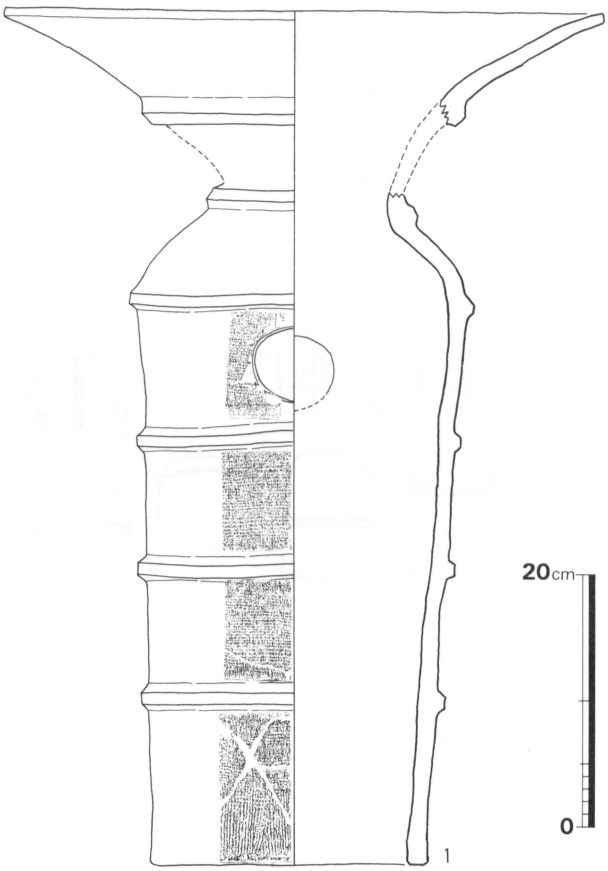
第６章　出土した円筒埴輪について

完形品で出土したものは１点もないが、推定復原によって、いくつかのパターンを考えることができる。このなかには、焼成、胎土、色調などによって、同一個体と考えてもよいようなものと、実際は異なっているが、図上復原でつくりあげているものとがある。出土した絶対量が少ないために、可能性も含めて考えているためである。

１．朝顔形円筒埴輪

１．（第21図）　焼成、色調、胎土などから、同一個体としてもよいと考えられるものである。口径47.8cm、底径20.2cm、高さ68cm、筒部の最大径27.5cmほどに復原できる。

筒部は５段で、外にひろがる口頸部は途中に突帯が１条めぐっている。突帯はいずれも中くぼみの台形状を呈している。



第21図　復原円筒埴輪実測図 ①（1/6）

外面は最下段を縦ハケでととのえた後に、横ハケで仕上げているのを除けば、筒部は横ハケで仕上げている。口頸部は斜めハケで仕上げている。肩の部分はナデで仕上げているが、ヘラナデのような感じである。

内面の筒部は指ナデであるが、肩のところは横方向、それ以下は斜め方向である。口頸部内面は外面と同じく斜めハケ仕上げである。

２．（第22図２）　焼成、色調、胎土などは１と同じで、これも同一個体の可能性を示すが、朝顔形にひらく口頸部が突帯のところで、傾きを変えている。口径41.4cm、底径20.2cm、高さ

第22図　復原円筒埴輪実測図 ②（1/6）

68.2cm、筒部の最大径27.5cmほどに復原できる。筒部は1と同じものである。

3．（第22図3）　筒部だけで、組合せてよさそうな口頸部は見当らない。筒部も上下は分れているが、焼成、色調、胎土は同じである。筒部は上下ともにほとんど同じで、頸のところが狭くなっている。

突帯は最下段を除き、一方がすこし低くなった中くぼみの台形を基本としており、最下段突帯は指おさえのまゝである。仕上げのハケ目は斜めであるが、一部横ハケのところもある。1．2とは大きさもちがうが、最下段突帯の格好が全く違っており、突帯も低く、仕上げのハケ目も異なっている。筒部の高さ48cm、底径17.5cm、筒部の最大径21.3cmぐらいの大きさである。

2．円筒埴輪

4．（第22図4）　焼成、色調、胎土などから同一個体としてもよいのではと考えられる。口径33cm、底径21.7cm、高さ51.8cmぐらいになると思われる。

5段の円筒埴輪になるものと考えられ、突帯はM字形に近いもので、比較的張り出している。外面の最下段は、1．2と同じく縦ハケのあと、横ハケで仕上げている。下3段は横ハケ、上2段は縦ハケによる仕上げで、内面は横ナデによる仕上げである。

5．（第22図5）　口径27.5cm、底径17.5cm、高さ52.5cmぐらいの口縁の開かない円筒埴輪になる。5段の円筒形で、なかの3段に円孔があけられている。突帯は最下段が貼付けの際に指でおさえただけで、上の3段は指なでで器体との接合をしている。

器体の調整は、外面は斜め方向のハケで仕上げ、底部の土に埋める部分を指なでで仕上げている。内面は口縁から13cmぐらいまでのところは、外面と同じハケ目仕上げで、それより下は指なでによる仕上げであるが、底部へ行くほど強く指なでの跡が残っている。

6．（第22図6）　口径25.6cm、底径17.5cm、高さ52.5cmぐらいの円筒埴輪になる。下半部は5と同じものである。つくり方は5と全く同様であるが、最上段の突帯が台形ではあるが、すこし甘くなっている。

器体は上半部が丁寧につくられ、下半部が雑になる傾向がみられる。

資料的な制約もあり、十分とはいえないが、図上復原した円筒埴輪を含めて、二、三の問題について考えてみよう。

出土した埴輪を従来の編年でみると、明らかに新旧二つの時期のものがみられる。朝顔形の

1、2、円筒形の4は突帯の格好、内外面の調整技法からみて、同一の時期としてよいだろう。出土埴輪のなかでは古く、出土している須恵器とも同じ時期のものとしてよい。

朝顔形の3は、円筒部分の上半部と下半部が、焼成、胎土など一致しているので、同一個体としてよいものである。最下段の突帯を除いては、中くぼみの台形状を呈して、欠塚古墳のものでは新しい形式のものである。

円筒形の5、6では上半部にすこし違いがみられるが、調整技法などは同じであるので、下半部と同一個体だとすれば、新しい時期のものといえよう。

従来の埴輪観からすると、この古い時期のものと、新しい時期のものでは、明らかに時期差を感じさせるものであるが、小破片として出土したものを含んで考えると、微妙な問題が残っている。

円筒埴輪は3類に分けることができる。

Ⅰ類　口径が28～32cmぐらいのもので、口縁部が外反するもの。口唇はすこし中くぼみを呈し、端部がほんのわずか内傾するかのような感じのものもある。突帯はよく目立ち、突出したもの、台形状のものがあり、台形状のものでも中くぼみのものもある。外面の調整は基本的には横ナデ仕上げである。

Ⅱ類　口径は26cmぐらいの大きさで、口縁部は直行気味だが、わずかに外反している。口唇はすこし中くぼみを呈するが、内側をすこし削りとったかのような感じを与える。突帯は低く、小さい。外面の調整は基本的には斜めハケ仕上げである。

Ⅲ類　口径が24～30cmぐらいの大きさで、口縁部は直行している。口唇は中くぼみ状のものもあるが、平らなものもある。突帯は台形状の中くぼみのものが主であるが、それよりも低い、くずれた台形状のものもある。外面の調整は基本的には斜めハケ仕上げである。

朝顔形円筒埴輪は口頸部の出土が少なく、筒部の状況によってしか分類できないが、2類に分類できる。

Ⅰ類　底部径が22～22.3cmぐらいのもので、突帯はわりあい突き出ており、台形状を呈するが、すこし中くぼみ気味である。

筒部は5段からなり、朝顔形の口頸部は、中途に突帯がめぐるが、そのまゝ外反するものと、突帯のところで傾きを変えるものがある。

Ⅱ類　底部径が19cmで、全くの筒形を呈し、突帯は台形のくぼみ状で、最下段の突帯は指おさえによって貼付けたまゝである。頸部の突帯は三角形を呈す。外面は斜めハケで仕上げている

が、一部横ハケも使用されている。

底部に関していえば、朝顔形円筒埴輪、普通の円筒埴輪と区別することはできないが、２種がみられる。

A　突帯はしっかりし、外面は横ハケ仕上げを主とし、底部端は縦ハケで仕上げている。

B　底部端がすこし内傾気味で、最下段突帯が指による押圧のみで接合している。突帯の格好は低くくずれた台形状のものと、中くぼみのものがある。

こうした分類を勘案してつくりあげたのが、先の推定復原の６体の円筒埴輪である。

以上のように分類してみたが、円筒埴輪ではⅠ類が古く、Ⅱ，Ⅲ類が新しい、朝顔形円筒埴輪ではⅠ類が古く、Ⅱ類が新しいということになる。従来の編年では、円筒Ⅰ類と朝顔Ⅰ類は５世紀後半、円筒Ⅱ，Ⅲ類、朝顔形Ⅱ類は６世紀中葉以降ということになり、時間的な継続も持たないということになる。

出土した円筒埴輪（朝顔形も含む）で、最下段突帯の状態がわかるものをみてみると、Ⅰ類とされるもの21.4kg、Ⅱ，Ⅲ類とされるもの36.4kgとなる。破片の大きさによっても重さは変わってくるので、十分とはいえないが、４：６の比率となって、新しい時期のものが多くなる勘定である。口縁部に関しても、Ⅲ類とするものが９点と一番多く出土している。埴輪の量からすると、むしろ新しい時期のものが多いと言わざるを得ない。

そうすると、この欠塚古墳では、一旦忘れされかかっていた古墳が、半世紀ぐらい後に大改築が行われたことを想定しなければならなくなる。今のところ、大改築がどのような理由なのかもわからないし、出土している須恵器では、古式の埴輪に伴うものがほとんどで、あえて言えば、提瓶が新しい埴輪に伴う可能性を残しているぐらいである。

少量の埴輪から考えるので、断定することはできないが、従来の編年観とは違って、新旧二つの時期の埴輪は、築造時に同時に使用された可能性のあることも考えなければならないのではと指摘しておきたい。

第７章　八女古墳群のなかでの位置づけ

１．前方後円墳の系列

九州第一の豪族、筑紫君の奥津城とされる八女古墳群のなかに、新たに前方後円墳を１基加えたことは、大きな発掘の成果であった。今まで11基の前方後円墳が知られていたが、これで12基になったことになる。このうち神南牟田古墳、釘崎３号墳は消滅してしまっており、いずこも同じで、破壊の危機にさらされている。そうしたなかで、この欠塚古墳が破壊が著しいとはいえ、筑後市で保存されたことは喜ばしいことである。

筑紫君の墳墓の系列としては、八女古墳群に限定してみると、①、石人山古墳→神南無田古墳→岩戸山古墳→乗場古墳→童男山古墳という小田富士雄氏を主とした考え方と、②、石人山古墳→石櫃山古墳→浦山古墳→岩戸山古墳→善蔵塚古墳→鶴見山古墳という、八女古墳群に限定せずに周辺の古墳をも考慮に入れた森貞次郎氏の考えをもとにした編年がある。私自身は②の系列を考えるが、となると、欠塚古墳をどこに位置づけるかということになってくる。欠塚古墳の時期は、久留米市の石櫃山古墳、浦山古墳ぐらいのところに置くことができると考えるので、石人山古墳と岩戸山古墳の間に位置づけることは可能である。しかし、墳丘規模からすると、両者が100ｍをこえるのに、欠塚古墳が45ｍとあまりにもちがいすぎるところがあり、すんなりと首長墓の系列に組みこむことはできない。

前方後円墳では、欠塚古墳と同じ頃のものを見出すことはできないが、大形円墳では、瑞王寺古墳、川犬古墳、茶臼塚古墳、真浄寺２号墳が挙げられる。全く同時期というわけではないが、位置的な関係をみると、筑後市から八女市の地域で、近接せずに、均等な間隔で分布していることが理解される。上妻郡では４郷、下妻郡では３郷が知られているが、何かしら、これに符号するかのようで、大形円墳と小さいながらも前方後円墳という違いはあるが、同じような身分を想定することができそうである。歴史時代にはいってからのものであるが、福岡市柏原遺跡から郷長と墨書銘のある土器が出土している。これを直接対比することはできないが、郷長的な性格をもつものと被葬者を想定することもあながち的はずれではないだろうと考える。

地域首長墓の系列を石人山古墳→石櫃山古墳→浦山古墳→岩戸山古墳と考えた時に、石櫃山古墳、浦山古墳は八女丘陵から離れて、久留米市東部につくられている。これは大和政権の影響力の強い、福岡県浮羽郡に本拠を置いたと考えられる的臣との勢力争いの緊張関係があり、力を誇示するために前線に居をすえた結果だと考えているが、そうだとすれば、欠塚古墳のみが前方後円墳であることは、主勢力を北に向けている時に、本来の本拠地を守る立場をになっていたために、ほかとは違った墳墓の形態をとったものと理解することもできるのではなかろうか。

八女古墳群を考える場合には、筑紫国造磐井の墳墓とされる八女市の岩戸山古墳の存在が、まず問題となる。磐井の墳墓について記述しているのは『筑後国風土記』だけであるために、その信憑性がどうかということになる。この記載を単純に信用する危険性については、古墳の実年代論とも関係して、疑点が提示されているし、また、今まで岩戸山古墳出土とされる須恵器をとりあげ、形式からみると、従来九州でいわれている須恵器のⅡ型式よりも新しいものが全てで、岩戸山古墳の年代を527、528年頃に置く場合、符号しないことも指摘されている。たしかに、岩戸山古墳の年代の疑問点は、記録優先で、考古学的操作によってなされていないので、ほかの古墳との比較もむずかしいところがあるが、現状では、磐井の乱とのからみで考えられていること以上には見解が出ていないと言わざるを得ない。

八女古墳群のなかで、一番古いと考えられている前方後円墳は、八女郡広川町と筑後市にまたがる石人山古墳である。かつては筑紫国造磐井の墳墓にも比定されたことのあるこの古墳は、初期の横穴式石室、横口式家形石棺、線刻による棺蓋への直弧文の装飾、武装石人の樹立という全くの九州的特色を兼ねそなえている。墳形については、造り出しをもち、後円部のみに周濠、周堤がめぐっており、欠塚古墳とも関連をもつ事象を示している。

これ以前の古墳については、不明なところが多いが、八女市の乗場古墳の東側丘陵地で、布留式併行と考えられる土器をもつ群集する周溝墓が調査されており、前方後円墳築造以前から、有力集団の造墓はなされていたことは明らかである。たゞ、こうした集団墓から石人山古墳の造営者が出現したのかとなると問題で、筑紫君という名前と係わりの深い福岡県筑紫野市の原口古墳、小郡市の三国の鼻古墳、津古１号墳のように４世紀代の前方後円墳のみられる地域から南下してきた勢力とする見解が有力である。

石人山古墳のあとに続くと思われる前方後円墳はしばらくみられず、今回報告する欠塚古墳があらわれる。欠塚古墳については、規模もそんなに大きくなく、首長墓の系列に組みこむことはむずかしく、前述したように郷長的性格を強く感じさせる。久留米市の石櫃山古墳、浦山古墳を石人山古墳のあとに置き、古墳の内容の類似性に系統性を求める。筑後川に近い久留米市の東部地域に進出したのは、筑後川中流域を本拠とする的臣との勢力争いの結果であり、緊張関係が解消したことにより、次代の岩戸山古墳の時には再び八女地方にもどったのであろう。これは浮羽の古墳が次第に在地化していく現象からもみることができよう。

岩戸山古墳が特異な状況をつくり得たのは、磐井の性格もさることながら、周辺地域を完全に掌握したことにより、安定した勢力を築きあげたことを背景に考えなければならない。岩戸山古

墳の内容、筑紫国造磐井の乱については、ここではふれないが、この時期が古墳築造においては、重要な節目であったことは、以後、横穴式石室を内部構造にもつ群集墳が出現することからも明らかである。

岩戸山古墳以降は、善蔵塚古墳、鶴見山古墳と本宗家系列の墳墓は続き、前方後円墳の築造も鶴見山古墳で終ると考えられる。前方後円墳の築造は終っても、群集墳の築造は継続しているのであり、広川町北部の高良台地南辺部、八女丘陵の東部地域、立花町の山麓部に多くみられる。立花町では横穴墓が多くつくられ、八女丘陵にも広川町の大久保周辺にわずかながら横穴墓がみられる。

この時期の有力な古墳としては、八女市の童男山1号墳、下茶屋古墳があげられる。童男山古墳群は、八女古墳群のなかでも東の方に位置し、横穴式石室内部に石棺、石棚をもつものが多く、際だった特異性をもち、石人も出土しているところから、岩戸山古墳の石人、石馬をつくった石工集団の後裔を想定している。本宗家系列の古墳としては下茶屋古墳を考える。岩戸山古墳のすぐ西側という立地条件も、かつての筑紫君の姿をしのぶ場所として、適当なところで、古墳の最後を飾るにふさわしいところといえよう。たゞ、この時期では、もはや規模が大きければ、それでよいというのではなく、三室構造的な横穴式石室に、被葬者への祭祀の重みをしのばせる。

このあと、古墳の築造はみられなくなるが、筑紫君が消滅したとも考えられない。氏寺としての寺院の建築がみられても当然なのだが、現在までのところ寺跡らしきものは見当らず、動向を知るすべがない。たゞ、近年、前国府ともいうべき建物群が久留米市の筑後国府跡で見つかりはじめており、いちはやく国家統制の下に組み込まれたことも十分考えられる。『日本書紀』天智天皇10年、持統天皇4年条にみえる筑紫君薩夜麻の名前などは、地方の権力者としての姿ではなく、令制下の人物にすぎないことを示している。

2．時代による古墳の格差

今まで、筑紫君本宗家の墳墓の動向をみてきたが、八女古墳の時代的な形成をみてみよう。前方後円墳、大形円墳、群集墳という3層構造から成り立っていることを述べたことがあるが、あらためてその状況をふりかえってみたい。

4世紀段階では、まだ、前方後円墳の築造はみられず、吉田辻の西遺跡のように方形周溝墓、円形周溝墓が主流を占める。内部構造に箱式石棺をもち、わずかに鉄製品を副葬するぐらいだが、規模の大小はすこしみられる。

5世紀前半になると、前方後円墳がつくられるようになり、一条の石人山古墳が出現する。大形円墳も今のところはっきりせずに、円形周溝墓的なものが群集して存在している。周溝墓の内部構造は箱式石棺、木棺直葬などで、規模の大小もみられ、特定の周溝墓に小形銅鏡を副葬していることもある。八女市立山の立山山古墳群中にみられるが、盛土もそれほど多くなく、4世紀代とほとんど変りないが、円形を基調としているところが変化といえるかも知れない。

5世紀後半になると、さきに述べたように、八女丘陵では、わずかに欠塚古墳が前方後円墳としては認められ、筑紫君本宗家の墳墓は北へ移動して、久留米市の石櫃山古墳、浦山古墳となる。特徴的なのは、大形円墳の築造が顕著になることで、瑞王寺古墳、川犬古墳、茶臼塚古墳、真浄寺2号墳、4号墳がみられる。もちろん、これらの古墳は並行した時期に存在していたのではないが、地域的に分散しており、郷的な小地域単位のまとまりでつくられたことを示している。さらに、群集する竪穴系横口式石室を内部構造とする小古墳群もつくり始められる。この小古墳にも小形鏡を副葬する例も多く、被葬者の性格も前代の周溝墓と基本的には変りないと考える。

ここに、前方後円墳、大形円墳、小円墳群という3層構造がはっきりとあらわれてくる。小古墳群の竪穴系横口式石室は、朝鮮半島伽耶地方からの移入と考えられ、基本的には単体埋葬となっている。おそらく、共同体内における家長の立場が社会的に認められるようになったため、それが墳墓にも作用したものであろうと考えられるが、それでも選ばれた家長であったことにはちがいない。そうしたなかの突出したもの、小地域の指導的立場をとるものが、大形円墳に葬られ、地域全体の統括者が前方後円墳というような状況を読みとることができる。

6世紀前半になると、岩戸山古墳が登場してくる。八女古墳群最大の古墳で、九州でも5指にはいる大きさをしている。岩戸山古墳については、別にのべるが、古墳の変革期でもある。岩戸山古墳につづくのは善蔵塚古墳である。この古墳は内容がまだわかっていないが、相当興味ある内容をもつことが期待される。大形円墳としては、立山山8号墳、13号墳、弘化谷古墳を挙げることができる。立山山8号墳と13号墳は同一地域にあり、時間的に継続する可能性が強い。石室は単室構造の横穴式石室で、矢部川流域で産出する片岩をつかって小口積みに積み上げ、胴張りをもっている。弘化谷古墳では石屋形をもち、なかに彩色による装飾もほどこされており、その内容は肥後北部の古墳と類似しているところも多い。立場的には5世紀後半代の大形円墳と変らないが、複数埋葬が主となるところに、近親者とのつながりも、埋葬概念のなかに組み込まれてきたことを示している。

この時期、群集墳の築造が途絶える期間がある。八女古墳群に限らず、全国的な規模でみられる現象である。細かい期間は今のところ設定できないが、急激に古墳の数を減少している。前方後円墳、大形円墳はつくられているが、それ以外の小古墳はほとんど見られない。前代の竪穴系横口式石室を内部構造にもつ小古墳と、6世紀中葉以降さかんにつくられる横穴式石室を内部構造にもつ小古墳とが、ほとんど群在しないことからも十分うかがい知ることができる。

前方後円墳と大形円墳のみで形成されているのが特徴で、墓制に対してのきびしい規制の時代である。地域首長、小地域の首長のみを対象とし、墳墓に地域的特色をみせる時代でもある。その典型はいうまでもなく、岩戸山古墳である。

6世紀中葉から後半にかけての時期は、群集墳の時代である。首長墓系列の前方後円墳としては、鶴見山古墳をあげることができる。規模としては、同じ頃と考えられる乗場古墳とさほど変わらないが、後円部をめぐる周濠は岩戸山古墳にもひけをとらない堂々としたもので、首長墓にふさわしい。前方後円墳の築造はこの古墳で終り、以後は円墳となる。この系列の古墳として、次にでてくるのは、下茶屋古墳である。径30mの円墳で、複室構造の横穴式石室をもっている。岩戸山古墳の前方部から100m程のところにあり、岩戸山古墳を十分意識した立地条件である。伝承されてきた筑紫君一族の栄華の時代をしのび、回帰現象とでもいえる気持が大きく作用したのであろう。

ほかの大形円墳としては、童男山1号墳、丸山塚古墳がみられる。場所は異なるが、広川町の大塚古墳、立花町の大塚古墳もあげることができる。この段階でも小地域有力者の墳墓がまだ明確に、ほかの群集墳と区別される状況をつくり出し、むしろ、地域首長の墳墓と近くなることが、末端までの支配機構が強くなり、地域首長の立場を在地から切り離すことを示しているのかも知れない。

前方後円墳は6世紀後半でも比較的はやい時になくなり、以後は円墳となる。その状況は、鶴見山古墳から下茶屋古墳への移行にみることができ、小地域の有力者がつくる大形円墳も依然としてつくられている。むしろ較差が小さくなるのが特徴ともいえる。その下に爆発的に増加する小円墳群があらわれてくる。古墳の終末まで、墳墓にみられる3層構造はつづいていたということになる。

3．群集墳の時代

小古墳によって形成された群集墳について見てみよう。横穴式石室を内部構造とする小円墳が群をつくって築造されるのは、混乱した継体朝のなかから生まれた中央集権的な欽明朝の成立が

大きな力になったと考えている。家族単位での掌握が可能となった段階で、それをより安定したかたちで維持するために、再度墓制に政治的意味をもたせて、つくらせはじめたのが、盛期の群集墳である。

群集地帯としては、八女丘陵につづく山麓の南斜面、広川町の高良台地につながる丘陵の南斜面、矢部川をへだてた立花の山裾と、大きくは三つに分けられる。このなかで、立花町のものは、横穴式石室がほとんど見られず、斜面に穴を穿っただけの横穴墓で、ほかの二つの地域とは埋葬方法が異なっている。横穴墓には単室と複室があり、崖面に無秩序といえるように並んでいる。

こうした地域のなかに、立花大塚古墳がある。径30mの円墳で、巨石を使った複室構造の横穴式石室をもっている。横穴墓の被葬者とは身分的に異なり、矢部川左岸の立花町域を統括する小地域首長を想定できる。

広川町の北部地域も群集墳地帯である。古墳は丘陵の縁辺部に東西に割合い長く分布している。平原古墳群、鈴ヶ山古墳群のように、竪穴系横口式石室を内部構造にもつ古墳群もみられるが、ほとんどは横穴式石室を内部構造にもつ円墳群で、前者から後者への連続性は見られない。

大塚古墳は、この地域では大形の円墳である。内部主体に複室構造の横穴式石室を2基もっていることもめずらしいが、地域を代表する古墳といえる。この地域では前方後円墳はみられず、大形円墳が最大で、ほかにも規模はすこし小さくなるが、山ノ前1号墳のように群集しているなかで目立つような古墳もある。おそらく立花大塚古墳の被葬者と同じような小地域首長層を考えることができるが、水原の古墳からは金製指輪の出土が伝えられているし、内田の古墳では両壁から石棚状の張り出しをもつ構造もみられるなど、興味深い事例もある。

八女古墳群では、丘陵部よりむしろ東の山裾の地域に群集墳がみられる。丘陵部は歴代墳墓の地として、特別の認識が強く残っていたので、一般的な群集墳の立地条件とも係わるが、墓域を東の方に限定したためであろう。本の団蔵塚古墳は墳丘はさほど大きくないが、巨石積みの複室構造の横穴式石室をもち、山内の童男山1号墳は終末の古墳では最大規模の大きさで、複室構造の横穴式石室をもっている。石室構造は乗場古墳のそれとよく似た構造であるが、家形の石屋形と刳抜きの石棺をもっている。童男山1号墳を含む童男山古墳群は、八女古墳群のなかでも、特異な構造をもつものが多いが、その特徴は、石室内の施設に阿蘇凝灰岩を使用していることである。

石屋形、石棺、石棚、棺床などにみられる。さらに、近年、3号墳の近くから、子供を背負っ

た石人、21号墳から座った石人がみつかり、石人、石馬文化を色濃く残している。石材加工に特徴をみせるこの古墳群の背景には、やはり、岩戸山古墳の石製品を無視するわけにはいかない。岩戸山古墳と童男山古墳群では、時期も異なっているので、同列に考えることはできないが、岩戸山古墳の築造で発揮された技術を受けついだ専業集団が、その後も継続し、6世紀中葉以降に古墳の築造がゆるされて、一斉につくった結果であろう。その時に他の集団が持たない技術を誇示してつくりあげた、もはや、ほかではつくられない石人をつくったのも伝統の上に成り立っている。石工集団の特殊性を如実に示している古墳群ということができる。

群集墳も6世紀末ないし7世紀前半には築造をおえるが、横穴式石室も複室構造から単室構造のものに変わる。しかも極端に小形になり、埋葬も単次埋葬となる。塚ノ谷古墳群中にいくつか見られるが、八女地方では、まだ確認されたものは少ない。浮羽郡田主丸の田主丸古墳群は、盛期から終末の群集墳の変遷を知るうえでの好例である。

第８章　欠塚古墳関係の聞き書

１．坂本友蔵氏と影塚名の土器の周辺

本報告、第７図にある須恵器杯蓋は、注記されているように、欠塚出土品と思われるが、波多野晥三『筑紫史論』(３）の285頁「また完形土器（不明）１個は水田村研究会員が保管していると言う」にあたると思われる。

この文章を読んだ時、坂本友蔵氏のことが頭に浮かんだ。氏は古代の遺跡に造詣が深く、筑後郷土史研究会を作った。筑後市の裏山遺跡は氏の念願で調査、保存されたが、報告書の集合写真の前列、鏡山猛先生の隣で旗を持つのが坂本氏である。

氏は農業の傍ら、近辺の農家へ自転車の荷台に種物を積んで売りに行っておられた。これは家を出るための口実で、本当は遺跡を見に行くのが本当の目的であった。

氏は久留米市藤田高塚の埴輪をもつ古墳を地主の長男、古賀高広君（当時中学生）が30年程前に石室を掘りあてた時、これを岩崎光氏に連絡、調査をされた。詳細は不明であるが、『八女・山門』の表紙に刀の図のある所がそれである。

羽犬塚町の郷土史家池田氏は、私は存じあげないが、坂本氏が池田氏に知らせ、調査になったのではないだろうか。

当時の関係者も少なくなり、坂本氏と欠塚古墳とのつながりをはっきりさせる事はできなかったが、私には晩年の山羊ひげが白い長身のおじいさんのことが思い出されてならない。

なお、筑後郷土資料館は氏と筑後郷土史研究会で集めた資料をもとに、彼らの熱意でつくられたもので、郷土史研究のシンボルでもある。現在も会員の皆様が交代で館を守っておられる。

坂本氏の影響を受け、全く同じ道を歩んでいる私には、彼と欠塚古墳とのつながりが色濃く頭の中に浮かんでくる。

２．一条納骨堂の記念碑

波多野氏の調査のあと、欠塚古墳はさらにみじめな姿になっていった。10年程前、当地方では納骨堂の建設ブームであった。

筑後市一条の納骨堂に欠塚古墳の石材が行っていると、広川町在住の佐々木四十臣氏に教えられ、行ってみた。堂北側の記念碑の主柱がそれらしく思われた。石工は中村好三氏で、筑後市赤坂の人で、現在の福岡銀行くらかず代理店と中村氏の息子の魚屋の店のところが工房であった。

そうしたことを見聞し、欠塚納骨堂へ行ってみた。やっぱりあった。

- 祖廟建設記念碑（うえの２石は変岩）
- 石材寄附：塚山組合員、角金次郎、原田茂、永松重雄、山口義、山口貞雄、原田一、山口龍彦
- 石工：中村好三

とある。この塚山組合員とは、欠塚古墳の共同所有者であろう。このような経過で、次第に石は抜き取られて、調査時のようにほとんど痕跡を残さないようになったのであろう。

図　　版

PLATES

(1) 欠塚古墳全景（空中写真）

(2) 同前方部（南より）

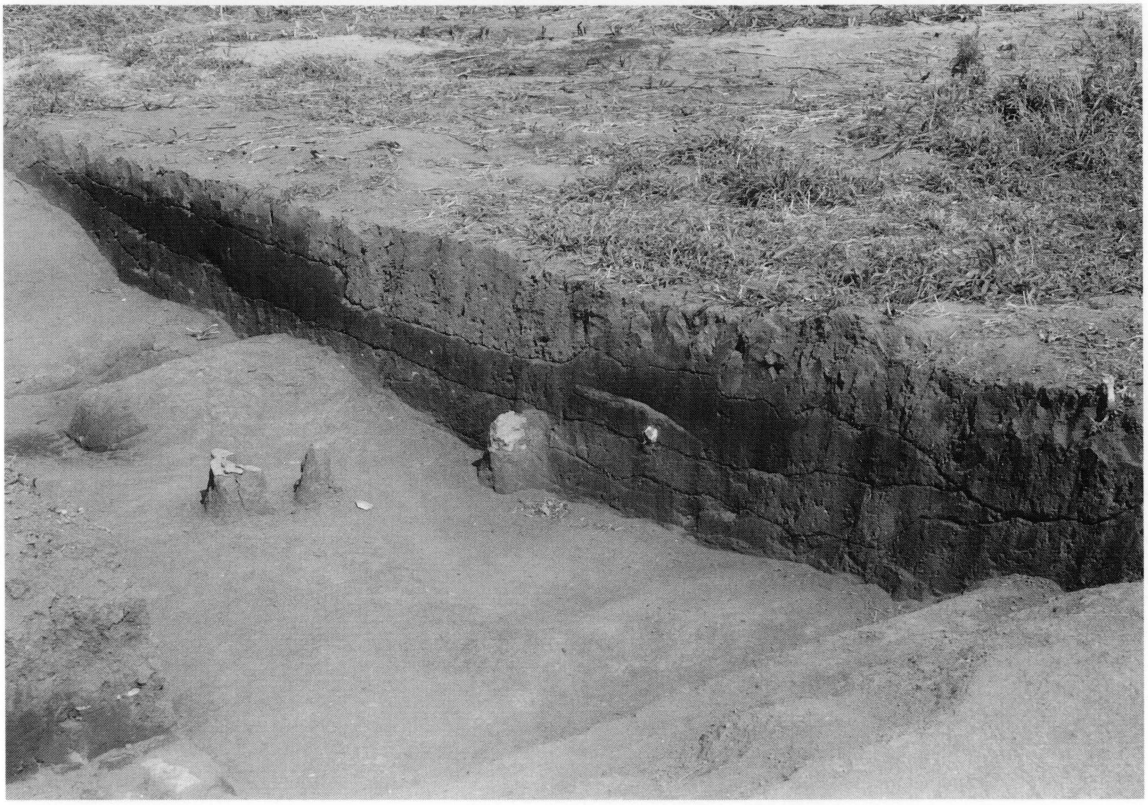
(1) 造出し部（北西より）

(2) 造出し部（南西より）

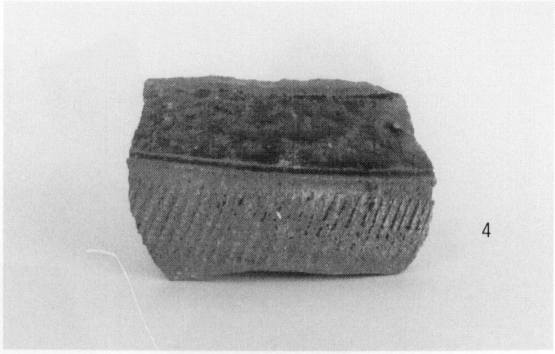
(1) 石室（西より）

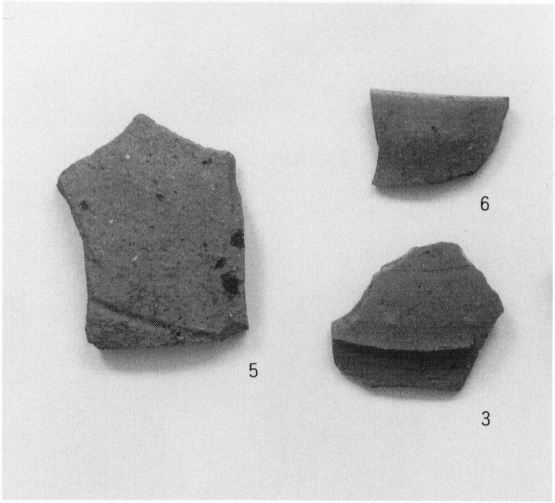
(2) 石室（東より）

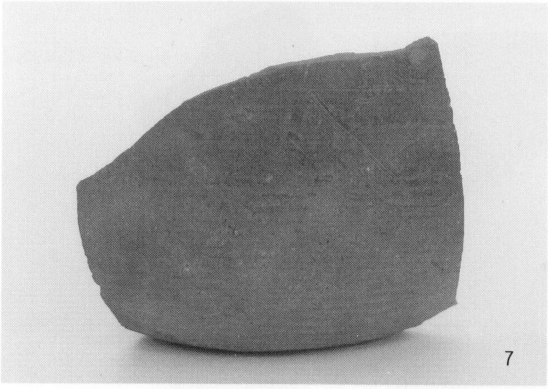
(1) 後円部２Tr・６Tr 付近(南西より)

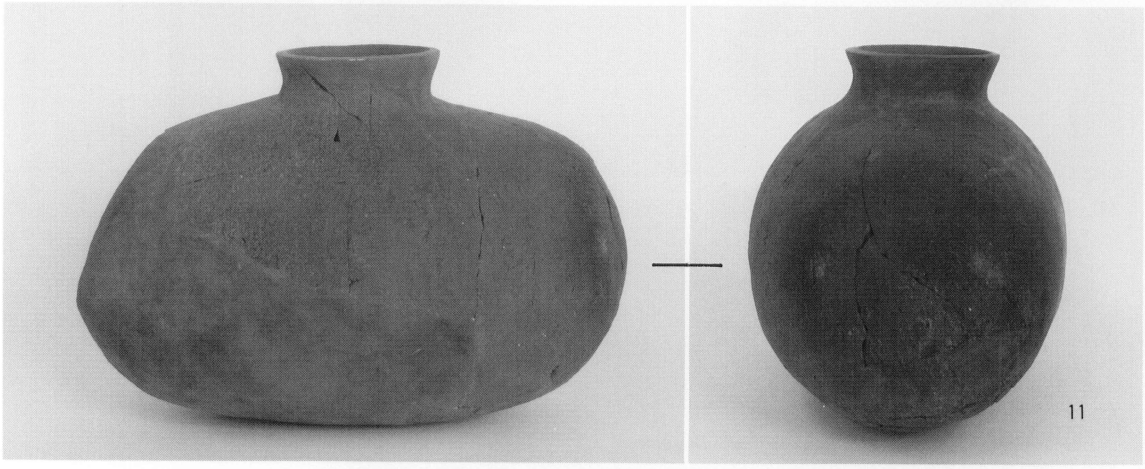


(2) 周濠土層（１Tr 北面）

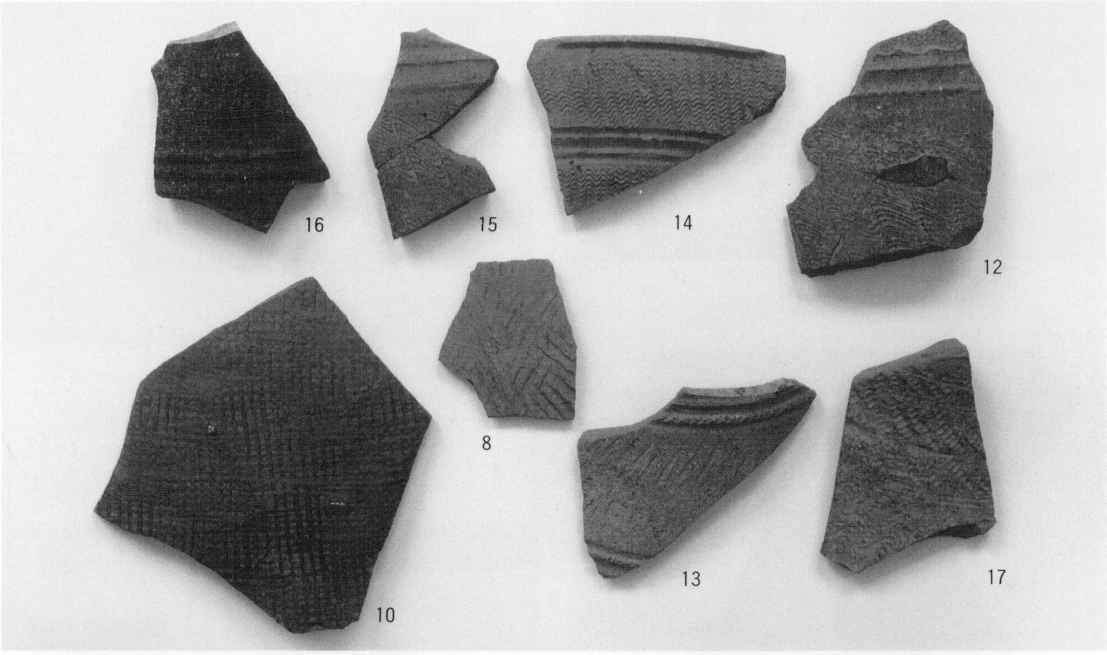








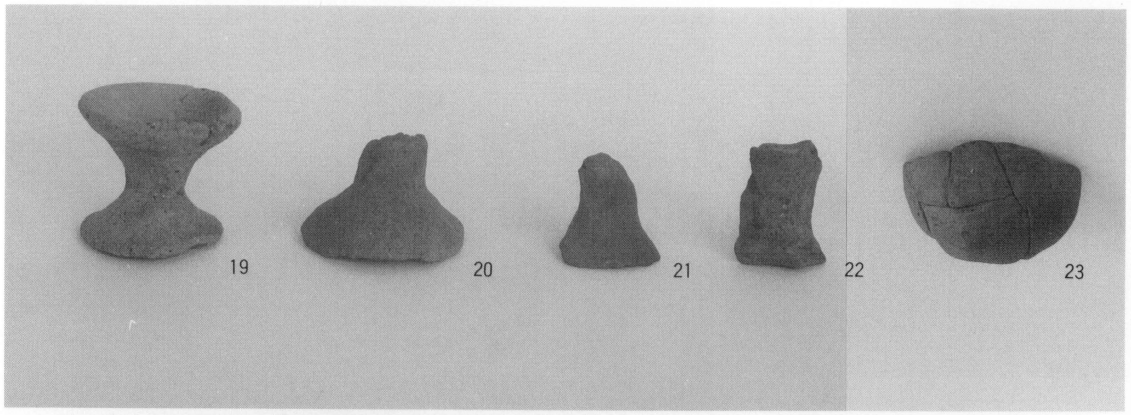
須恵器

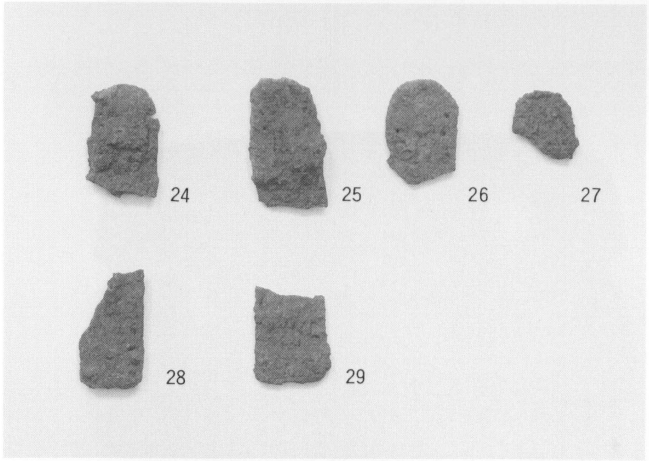


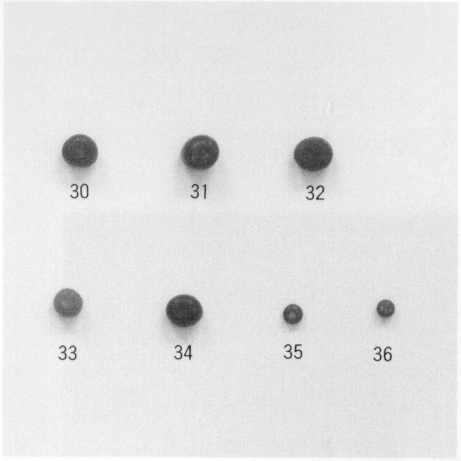
(1) 須恵器　甕・器台細片（表）

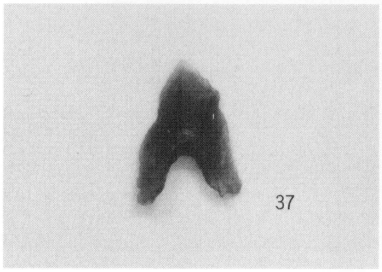
(2) 同（裏）

(1) 須恵器　坏蓋
（昭和28年　岡山村「影塚古墳」出土）

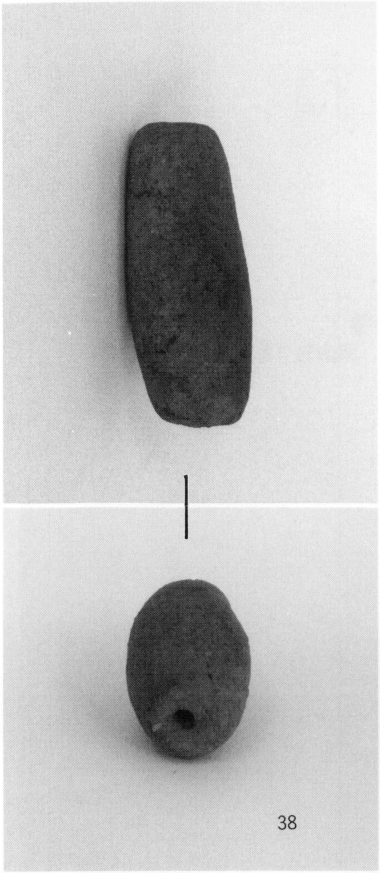




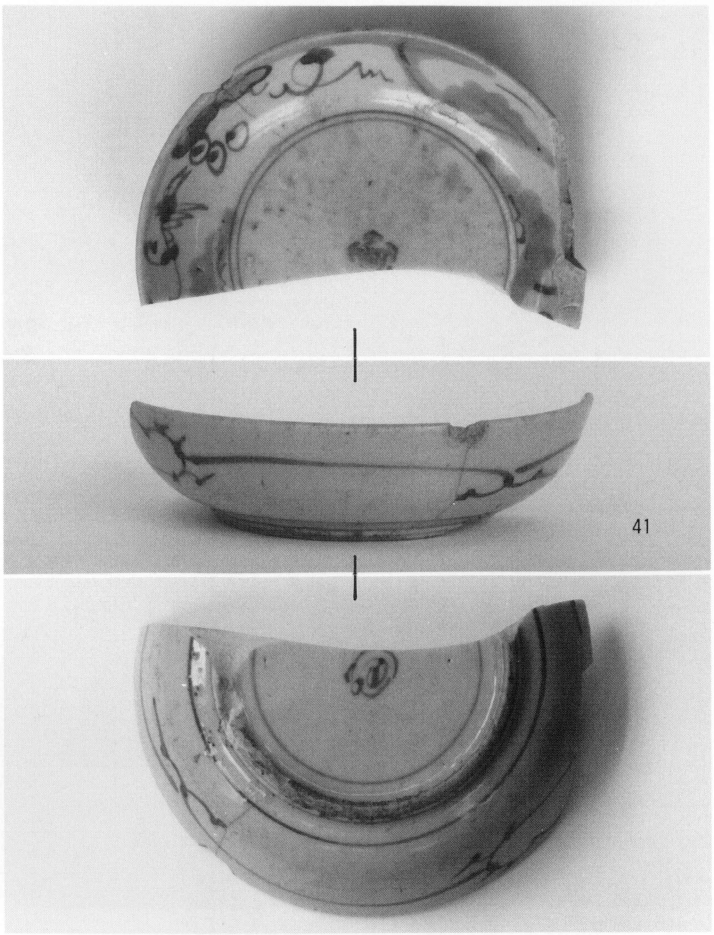




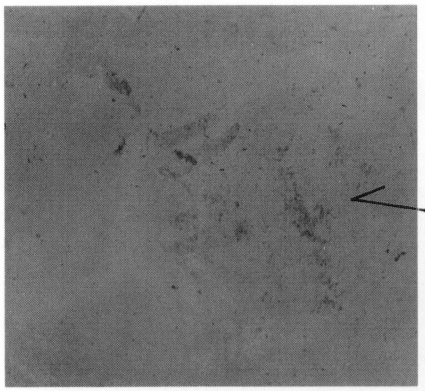
(2) 手づくね土器・小札・ガラス玉・石鏃



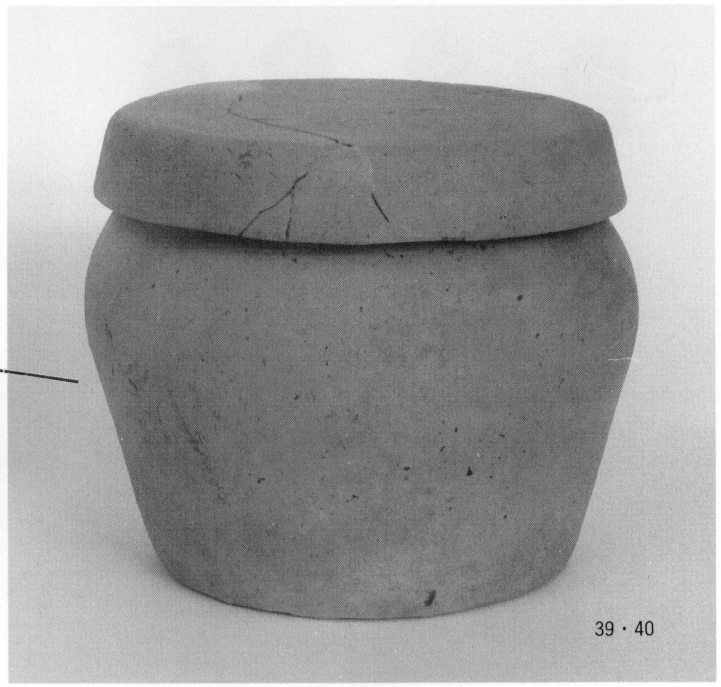
38



41



墨書

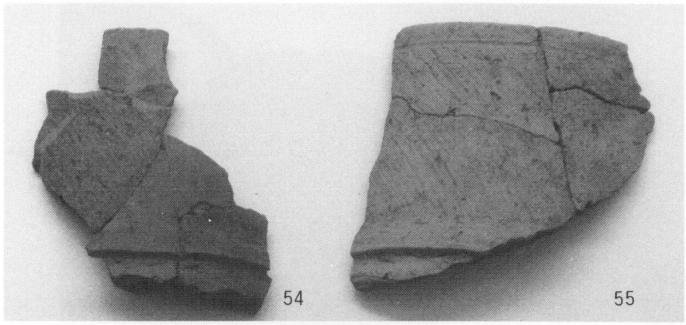


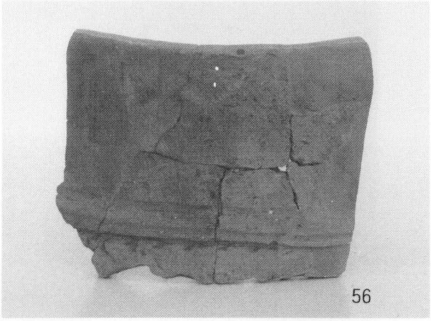
39・40

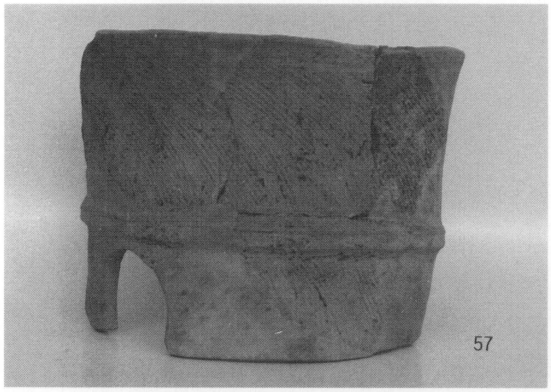
土錘・染付・蔵骨器

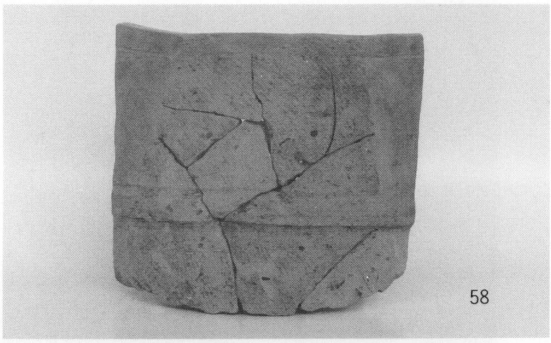
(1) 埴輪（蓋（きぬがさ）・朝顔形）

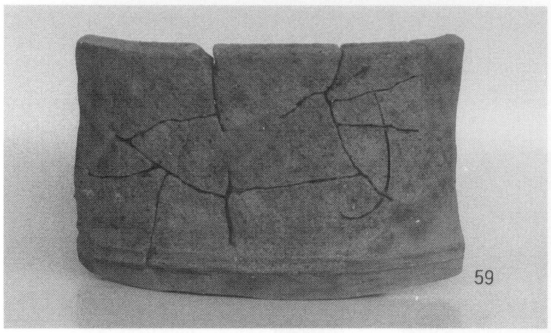
(2) 普通円筒埴輪　口縁部「Ⅰ類」

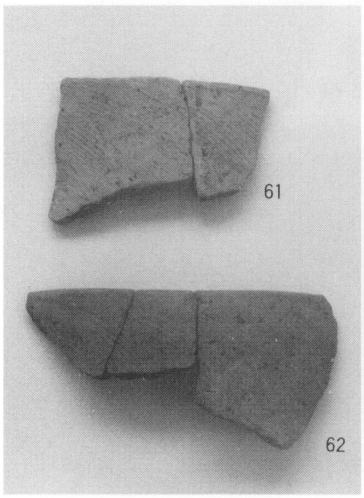


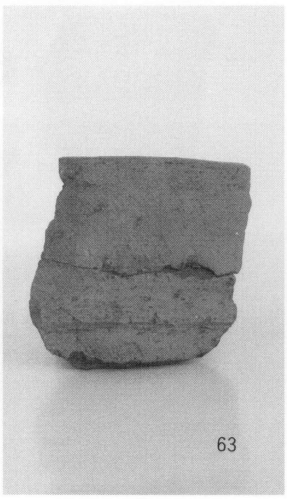


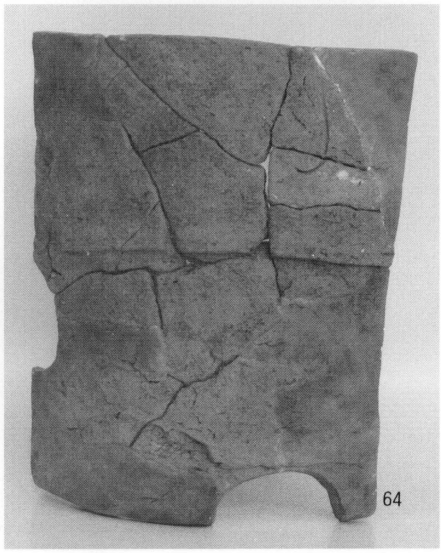




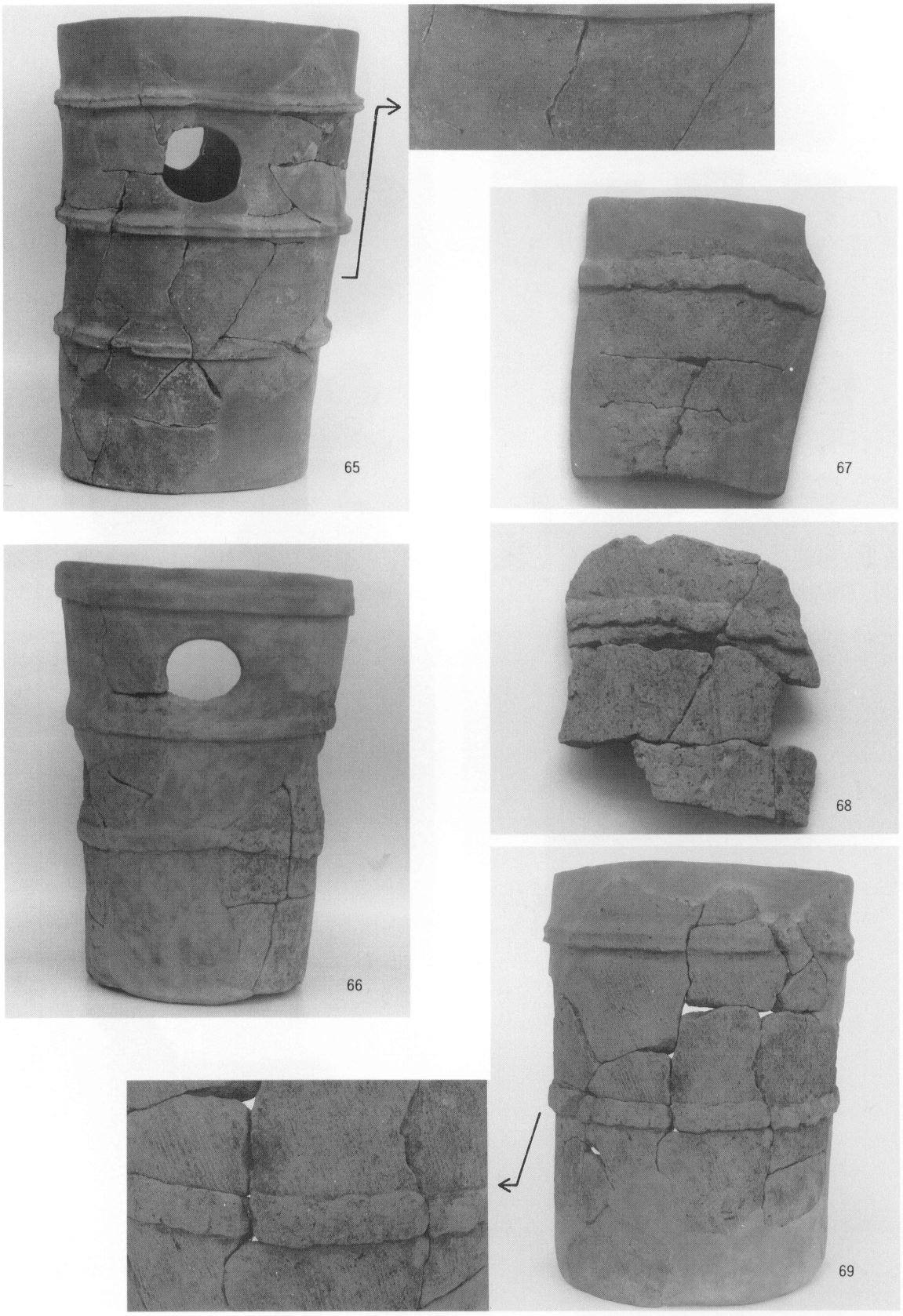




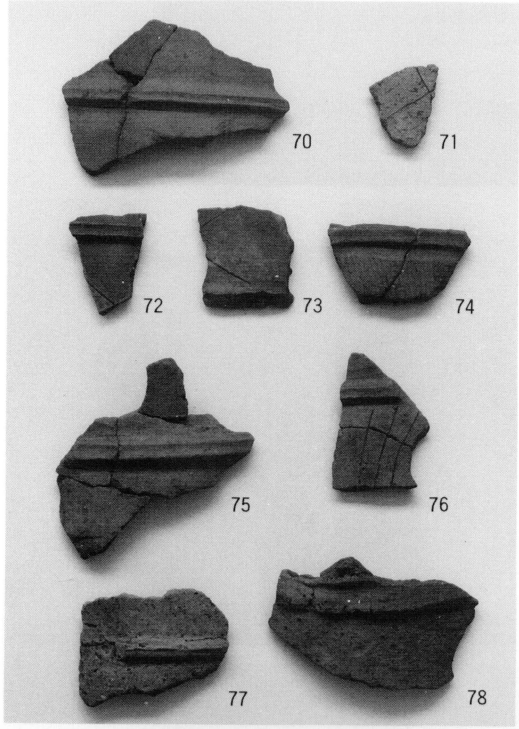




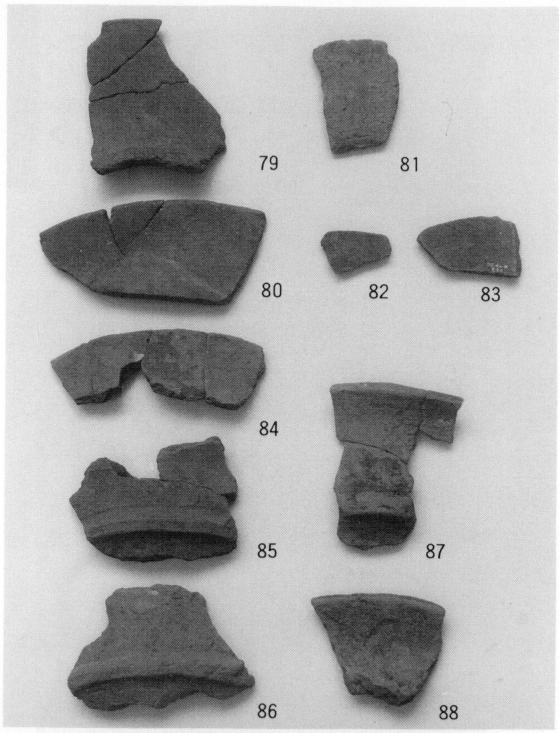
普通同筒埴輪　口縁部「Ⅱ類」



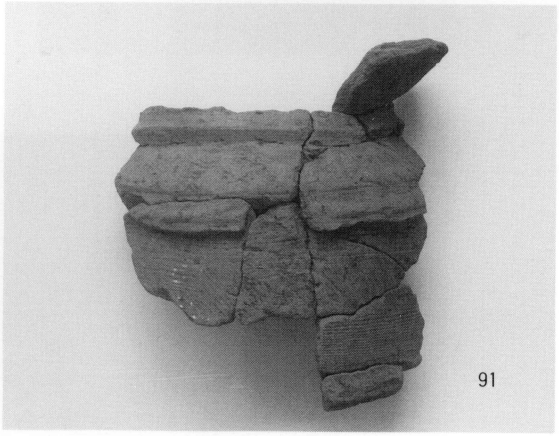
円筒埴輪　底部「Ⅰ類・Ⅱ類」



(1) 円筒埴輪　胴部



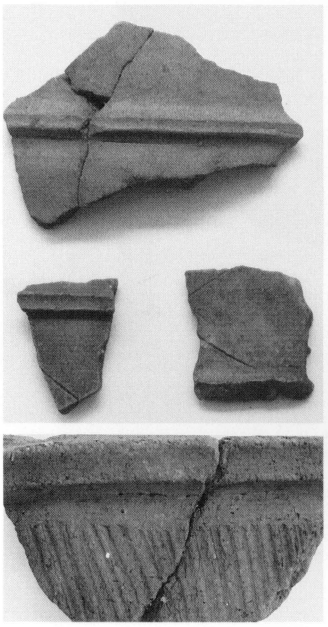
(2) 朝顔形埴輪　口縁部

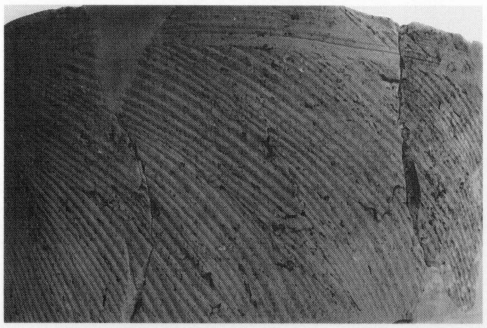


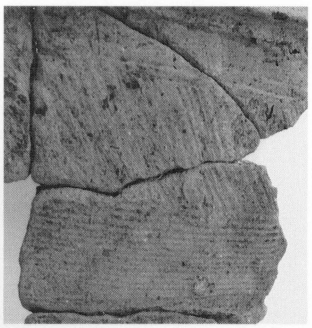
(3) 朝顔形埴輪　筒部

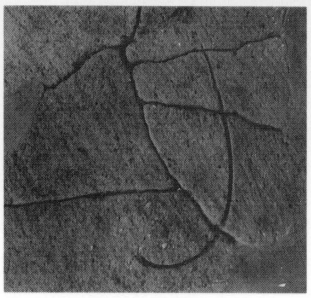
前方部周濠出土　蓋（きぬがさ）

(1) その他の形象埴輪









(2) 刷毛目調整・ヘラ記号など

欠塚古墳

筑後市文化財調査報告書
第 8 集

平成 5 年 5 月 31 日

発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井 898

印刷　アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9－31